
魔法少女リリカルなのは～疾走する聖遺物～

あじゃじゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは疾走する聖遺物

【Nコード】

N0543S

【作者名】

あじゃじゃ

【あらすじ】

これは無印から始まり、未知を求め続ける少年のお話である。

prologue (前書き)

どうも、初めましての方もお久しぶりの方もおはこんばんわ。

今回はプロローグです。

次回から無印編が始まります。

今回はほとんどがセリフで描写はありませんが仕様ですので気になさらないください

prologue

突然だが、あなたは既知感というものを経験したことはあるだろうか。

既視ではなく既知。

既に知っている感覚。

それは五感、六感に至るまで、ありとあらゆる感覚器官に訴えるもの
たとえばこの風景は見たことがある。

この酒は飲んだことがある。

この匂いは嗅いだことがある。

この音楽は聴いたことがある。

この女は抱いたことがある。

そして、この感情は前にも懐いたことがある。

錯覚——脳の誤認識が時に生み出す、なかなか風情ある一種の錯覚。

あなたはそれを経験したことがあるだろうか。

「たとえば俺は以前にも勝負に負けていたと？」

二人の男がどこか神殿のような場所で話し合っている。

その景色はおかしく、二人の顔すらわからない。

「さて、それはそうなってみなければ分からない。そうなってみて、初めてそうだったと思うが故の既知感である。」

あなたのそれはただの予感だ。いや――敗北願望
と言っべきか」

「ああ、そうだな」

「不思議なことを思うお方だ」

「ならば問う。お前は数多の人間が夢想する、死者反転都やらの成功を信じているのか？ 神々の賢者、空前にして絶後の最古にして最強の魔術師、世界の真理にもっとも近いとさえ言われる、ヘルメス・トリスメギストス――お前ほどの男が、この愚かな絵図を肯定するか。私はそうは思わない」

「しかし事実として、あなたが存在する。それを手にした者は、必ず理を壊すと言われた破壊の鎌の正当後継者――断頭刃の死神。疾走の君。あなたがここにいる以上、ありえないなどありえない」

「だが世界は俺を殺した」

「ほう」

「初耳だ、などとは言えないだろう。世界にあつてお前の知らぬことなどは、それこそ微塵もあり得ない。故に俺は、この勝負に敗北すると言った」

「あなたは死なれるおつもりか？」

「事実としての生死は些事だ。世界の中で、俺と言う存在がそのような位置付けられたことに意味がある。もはや取り返しは効かない」

「なるほど。たしかに死者を——概念はどうであれ普通は生き返らせるなど不可能。私でさえできない。死者は死んだものゆえに、生者へ反転させることなど不可能である。この法則は甘くない。女子供の夢物語は、まさしく寝言と同義同列」

「ゆえに法則を曲げたければ、夢物語を排除せよ——
——お前の持論だったかな」

「祈れば叶う。泣けば奇跡が舞い降りる。そのような^{デウス・エクス・マキナ}都合主義、私に言わせれば唾棄すべき邪悪でしかない。もし斯様な法則が成り立つなら、我が祈りは宇宙開闢すら起こしただろう。

万人に都合のいい幸せな夢などない。この世界は容赦なく、慈悲もなく、血と狂気で出来ている。ゆえに我が意を通したければ、血と狂気に染まるのみ。

一人の生者が欲しければ、その数千倍の死者を捧げよ。

破壊より再生の方が難しい。誰しも何かを奪い合う世界においては、それもまた真理の一つ。しかし、いささか話が逸れたか。

あなたは自らの死を回避するつもりがないようだ。少なくとも世界にはそう思わせておきたいと見える」

「死を想え《メメント・モリ》——座右の銘でな。人はいつか死ぬということを忘れてはならない。死は、重い」

「だがそれゆえに、あなたは生死を超越するに相応しい」

「超越はお前の印^{イン}だろう、俺が司るのは天秤のみだ」

「ゆえに物語という法則を破壊し超越できる……ふむ、前言を訂正しよう。破壊は再生よりも容易いが意義がある。いや——
元に戻す必要などそもそもない」

「どういう意味だ？」

「繰り返すということは、存外に苦痛であるという意味だ死神殿。たとえばそう、あなたといえど幼年期はあっただろう。その時分、一日がとても長く感じられなかったか？ 一年とは、永遠と同義に値するものではなかったか？」

「確かに、子供であつたなら世界は未知で溢れている。知らぬことが多い以上、学ぶべきことが膨大である以上、時はゆっくりと流れるだろう」

「然り。まさしくその通り。すなわち人の一生とは、未知のものを学び、既知のものへと変える作業に他ならない。」

それが故にこう思う、毎夜毎夜同じ説教を繰り返す父。同じ料理を与える母。同じ笑顔を浮かべる隣人。同じ声で鳴く小鳥。同じ匂い

しかしない家。

究極——同じようにしか沈まぬ太陽。

ああ、なんとつまらない。世界はこんなにも退屈だ。

これを老いと人は言う。一步一步着実に死へと向かっていく強行軍。だがそれでも、年月と共に減っていくというのはいうものの、未知を経験できるだけ幸せだ。生きているのだから、人は「

「つまりお前は、未知を経験できない者は生きていないと？」

「仮に、もし仮に、生まれた時から未知を排除された存在がいたとする。」

——既知感。

彼の生は、既に知っている世界で既に知っている出来事だけを、繰り返し繰り返し見せられるのみ。

なんという地獄の苦しみであることか。始まりから生きていないのだから死ぬこともできない

否、死ねない。私はこの世界に生まれたという証が欲しい。

狂おしいほどに未知が欲しい。

私はあなたに、この世界の残虐なる秘密を教授しようとしている。

それを聞く勇氣はお有か？ あなた以外の誰にも話そうとしなかった、真理にもっとも近いとやらいう、秘密を」

「答える前に一つ――なぜお前は、それを俺だけに明かそうとする」

「私が、あなたを畏敬申し上げているからだ、死神殿

あなたは私と同じ苦境を何度も繰り返しておられる」

あなたを除けば、あなたは私が知り得る中で、もっとも悪魔に近い人間だ」

「陳腐だな、カール。悪魔などという呼び名、珍しくもない」

「究極に近くなるほど、言葉は陳腐になるもの。

火を水のようにだとは言いますまい。

火は火のように。水は水のように。そしてあなたは悪魔のように。

あなたは私を魔術師と言ったが、生憎この身はそんなものではない。

単純に言い表せるのは強き者のみ、私は弱くいい加減だ。

常に本質が揺れ動き、名前だけでも幾百幾銭と持っている。

弱い。

どうしようもなく。

脆い

それが私。

あなたのごとき絶対とは、比べるべくもなく卑小な存在。

しかし、だからこそ分かることもあるのです

答えをお聞かせ願いたい」

「よかるう、お前は俺を絶対と言ったが、たった今、俺にもそう思う者ができた。カール、我が友……俺もお前を畏敬している。お前の秘密に触れたいと願う。それすらも、既知感とやらの環の内なのかな？」

「残念ながら、そのようだ。そうなってみて、初めてそうだったと思うがゆえの既知感である。口惜しい。呪わしい。あなたと出会い、あなたほどの地獄に触れても、まだ私は生きていない。このままでは死ねない」

「なるほど、分かるぞ。その無念。お前の苦しみが手に取るように」

「ならばご理解いただけるか。あなたが天秤を司るなら――」

「――」

「……面白い、全てを捻じ曲げるか」

「そう、この世界を、この物語を、天国も地獄も神も天使も、三千

大千世界の総ての物語に干渉しよう。

知らない結末を見つけるまで

この既知感ゲットーを超越するまで

それこそが――

「ああ、そういえば、俺とお前は前にもこの話をしていたな」

「然り。然り。百億回も繰り返した。我々は、未だこの牢獄に囚われている」

「口惜しいな」

「ええ、まったく。おや、どうやら時間も迫っているようですな」

「では行ってくるか」

「ええ、良き物語を」

p r o l o g u e (後書き)

感想とかお待ちしております。

episode ? (前書き)

もう少し、内容が深い物語を作りたいな

その前に、ちゃんと連載させなくちゃなwww

episode ?

「つまらん」

少年は公園のベンチに座り、公園の景色を眺めながら呟いた。

その少年は腰辺りまで伸ばした黒髪に女と間違われそうな顔だった。

十人居たら十人とも振り返るだろう。

それは単に容姿のせいではない、少年の存在感とでも言うべきか。

見なくても分かる。

人として——生物としての密度が違うのだ。

だからか、子供はおろか大人ですら近寄らない。

少年は空を見上げて昔を振り返る。

生まれてから7年、あつという間だった。

なぜなら総てが既知だったのだから。

色々と試してみたが駄目だった。

諦める訳ではないが、過去を振り返ってみても意味がない。

少年は顔を前に戻すと一人の少女が砂場で一人、遊んでいた。

ほんの気まぐれ、そう気まぐれだがその少女の事が気になった。

気まぐれでも起こす行動もまた一興か…そう考えた少年は少女の下へと歩き出す。

なのはside

お父さんが大怪我しちゃって家族が一変したの

お母さんは忙しそうにいつもしてるし

お兄ちゃんとお姉ちゃんはなんだか怖くなっちゃった。

私はみんなに元に戻ってほしいの

だから迷惑になることはしないし我儘も言わないようにするの。

家にいると気まずいのでお外に出る。

この時間帯なら公園が一番良いの

公園につくと少しだが他の子どもたちが遊んでいた。

知らない子達、楽しそうなの。

一人で砂場でお城を作るの。

寂しい、でも泣くのは我慢しよう

「ほう、一人で砂の城を作ろうとするとは……なかなか大変だとは思うのだが」

そうしていると一人の男の子が話しかけてきたの。

「…あなたは？」

「これは失敬、自己紹介が遅れたようだ」

なんだか凄そうな人なの、なにが凄いか分からないけどもとにかく凄そうなの。

「俺の名前は……そうだな、今は迅と名乗っている」

「今は？」

「ああ、気にしないでくれ。何分、今までこの世界では名前などとは必要なかったのだね」

この世界では名前が必要なかった？

「それよりも、君の名前は？」

「ふえ？ あ、私の名前は高町なのはって言います」

「良い名だ、よろしければ一緒に城を作っても良いかな？ 恥ずかしながら一人なものでね」

私と一緒にだ

やっぱり一人は寂しいのかな、私はすぐに頷いて城と一緒に作り始めた。

「思っていた以上に難しいな、特にこの城の頂上の屋根は」

ふええええ！？　なんで砂で作ってたはずなのにこんな凄いのが出てくるの！？

辺りが夕暮れになり、もうすぐ日が沈みそうな時間の頃にお城が完成した。

それも城壁が私のお膝ぐらいまであって、周りの塔とかも屋根が丸い三角形になってたりしてるの。

「我ながらなかなかの出来だと自負している」

「こんな砂のお城、初めて見たの」

二人で汚れながらも満足感が私にはあった。

隣を見てみると、迅くんはどこか悲しげな表情をしていた。

「どうしたの？」

「む？　いや、なに……またデジャブが来てしまったようだね」

でじゃぶ？　なんだろうそれって。

「しかし、今日はここまでのようだ。家に帰りたまえ、家族が心配をする」

「う、うん。わかったの……あのね」

「俺ならば明日もここにいるよ、来たければ来たまえ」

「うん！」

私は笑顔で手を振って家へと帰る、友達が出来て嬉しいの。

それからというものは公園に入り浸るようになった。

迅くんのこととかも色々と聞いたの

既知感だっけ、私も経験したことがあるの。

それが生まれてからなにをしても起きるんだって。

想像がつかないけどもちよっと辛いことなんだって言うてたの。

辛いのは可愛そうだけでも私じゃなんにもしてあげられないの。

そうだ、もうすぐお父さんが戻ってくるらしいの。

それを聞いた家族のみんなは喜んでたの、もちろん私も

そのことを迅くんに話したら

「ほう、それは良かった。俺なのは相談に乗ることではか力になれなくてすまなかったね」

迅くんはそう言ったけど違うの。

家の事と、家での私のことを相談したら

『少しばかり我儘を言ってみると良い、話に聞く通りの家族ならばきつと何かが変わる』

って言われて怖かったけど言ってみたら、ちょっとだけ雰囲気が変わったの。

言葉にするのは難しいけども少し柔らかくなったっていうのかな？

お礼を言つと迅くんは微笑んで

「なに、俺は提案をしたまでだ。その案を決定し、実行に移したのは君だ。俺はなにもしないさ」

「それでも、迅くんが言ってくれたからできたことなの！」

「ふむ、そこまで言うのならありがたくお礼を受け取っておこう」

私はちょっと乱暴にだが頭を撫でられる

ふにゃ、気持ち良いよ。

そんなこともあったりして、お父さんが帰ってきてからしばらくが
経ち

ある日、夕食の時に母さんが私が初めて我儘を言った時の話をしたの。

「そうなのよ、なのはが珍しく我儘言ってね」

「そうなんだよ、それで少しは俺達も周りが見えるようになったんだよな」

「うん、なのはのおかげよ」

「よくやったな、なのは」

みんなから褒められたの、お家の雰囲気も良くなったし全部、迅くんのおかげなの

「そう言えば、なのは最近お外に良く遊びに行くわね」

「うん、迅くんって子が居てね――」

私はみんなに迅くんのことを話したの

私の最初のお友達になったこと、迅くん相談に乗ってもらったこと、公園でいつも遊んだりお話を聞いたりすることを。

全部話し終わるとお母さんとお姉ちゃん嬉しそうに「なのはにも春が来たのね」とか「最近の子は進んでるわね」とか言ってるけどどういうことかな？

お兄ちゃんは「認めんぞ！ 絶対に！！」って燃えてるし

お父さんはなにか考え込んでるし

ふええ、なんか私やつちやつたみたいの〜！

「なのは、明日お礼に行かないか？」

唐突にお父さんがそう言った

「丁度、明日は休日だし翠屋も始まる前に出かけよう」

「あら、良いわね。仕込みは二人に任せましょうか」

なんだかお父さんとお母さんは乗り気です

「という訳で、夕食時だけとその迅くんに連絡を取れないかな？」

連絡？ そう言えば……

「私、迅くんの家とか電話番号とか知らないの」

「「「「え？」「」「」

そうだったの、すっかり聞くこと忘れてたの

「でも大丈夫、迅くんって毎日公園に居るから！」

そうなの、いつも居るの

「なら、明日行きましょうか」

「ああ、少し朝早いから居るか分からないけどね」

そうして今日は終わったの。

翌朝、頑張つて起きて朝早くに公園に向かったの

「おや、誰もいないな」

「残念ね」

二人は公園を見渡して誰も居ないことを確認するの。

「でもなんだろうか？　なんか前と公園の感じが違うな」

「そうね、なにも変わってないはずなのに」

お父さんと、お母さんは初めてだから分からないだろうけど私には分かる

「迅くん、来てるの」

違和感…違う、存在感が一番強い場所へと私は向かう

お母さん達も私の後ろに着いてくる。

ベンチの後ろの茂み

そこに入って行くと何十匹の犬や猫、小鳥に囲まれて寝ている迅くんが居たの。

「あはは、寝てるの」

この光景が凄く可愛らしく、頬が緩んじゃってるのがわかるの。

「う…ん、なのかな？」

「なのかじゃなくてなのはだよ、おはよう迅くん」

「やあ、おはよう」

少し眠そうだけど起きたみたいだ。

「すまんが少し顔を洗ってくる」

迅くんは公園の水道で顔を拭いて、頭をブンブンと振って顔の水滴を取る

なんだか不思議な光景なの。

私は少しだけ吹き出してしまった。

side out

士郎side

「お待たせ、朝からとは珍しい…そちらのお二方は？」

「お父さんとお母さんの！」

なのはがボク達のことを紹介してくれる。

だがボクはこの子から目を離せなかった。

なんだこの圧倒的な存在感、単純に人としての密度が違う

そうはつきりとわかる。

桃子もなにかを感じているのか一瞬足りともこの子から目を離さないでいる。

でもその眼は優しいだ。

「こんにちは、私は高町桃子って言います」

「これはご丁寧に、俺は迅と言います。以後よろしく」

礼儀はちゃんとしているようだ、悪意も感じられはしない。

「ボクの名前は高町士郎、なのはがお世話になったね」

「いえ、こちらこそ世話になりましたよ。どうやらお怪我は治ったようですね」

「うん、ばっちり治ったよ」

不意に、目が合ってしまった。

瞬間、ゾクリと背筋に寒気が走った。

だがそれは恐怖からではなく、この子の深さにだ。

分かってしまった、このカリスマ性を

見る限りまだなのはとあまり変わらなさそうなのに……未恐ろしいな

「ねえねえ、なんで迅くんはあそこで寝てたの？」

なのはが気軽に話しかけていた。

この圧倒的な威圧ともとれる存在感の中でそんなリラックスできてるなんて、家の娘もある意味で凄いいんじゃないのか？

「なに簡単なことさ、あそこが俺の家だからだ」

なんだって？ どういうことだ？

「お家なの？」

「ああ、五年はそこで暮らしていたな」

五年！？

まだ7、8歳ぐらいだろうに

「なあ、迅くん」

「なんでしょうか？」

「君、家に来ないかい？」

「ははは、またまた御冗談を」

「冗談なんかじゃないさ」

「ええ、貴方さえよければけどね」

「……………ふむ」

顎に手を当てて考える迅くん

ちらりと、なのはを見てから

「御迷惑でなければ」

そう言ったのだった。

この日、我が家に新たな家族が出来たのだった。

s i d e o u t

e p i s o d e ? (後書き)

ストックの消費はご計画的に

episode ? (前書き)

この作品は基本的にはリリカルなのは原作に沿って話を進めますが聖遺物を所持している相手とも多数戦います。

黒田卓を出すかは凄いい悩んでおりますが今のところ出さずに行きたいです。

主人公については未知を求めながらも今の現状を気に入っているという状態です。

また話し方も本人が割と必死に砕けた感じにしようとしているのでちょっとおかしい感じがするかもしれませんが仕様です。

とにかくご鑑賞くださいませ!!

episode ?

俺が高町迅となってしばらくが経ち、なのはは小学三年生になった。

俺も父さんと母さんから小学校への入学を薦められたがいかんせん…戸籍が存在しなかった為に入学などは出来なかった。

もちろん今はちゃんと存在するためにやれるのだが小学レベルなど容易すぎるので入る必要がない。

とにかくなにもしないよりはマシなので翠屋で手伝いをしている。

年齢は小五なので身体も出来上がり始めている。

「ただいまー」

「ああ、お帰り」

俺が丁度、仕事が終わったところになのはが帰って来た。

「迅お兄ちゃん、今日ねアリサちゃん達と一緒にフェレットを拾ったの」

「ほう、それで」

「でも怪我しちゃってたから動物病院に連れて行ってあげたの」

「生物を慈しむことは大事なことだ、よくやった」

頭を撫でてやるとなのは顔は赤くして照れる。

初々しいな。

だがこれもデジャブる。

忌々しい、まだ既知感ゲッターの呪縛を超えることは出来んのか

「それでね、アリサちゃんとずずかちゃんがまた迅お兄ちゃんと会いたいだつてさ」

「ふむ……では近いうちに会いにでも行くでしょう」

関係ない話だがこの数年で俺の口調もいくらか柔らかくなったような気がする。

努力していた甲斐があったな。

まだ不慣れとはいえ少々大人びた話し方程度までには抑えられただろう。

「これも、なのはのおかげか」

カールには前の口調の方が似合っていると言われたんだが、まあ今回はこういう物語なのだろう。

「なにが私のおかげなの？」

「いや、なんでもない」

口に出してしまっていたか

とりあえずもう一度頭を撫でておく。

「えへへ、迅お兄ちゃん」

背中に抱きつく…もといぶら下がるなのは。

思ったより軽いな。

首が閉まっているが特には気にならない。

一応、これでも俺は ■ ■ ■ なのだからな。

その夜、俺は街に出ていた。

何か嫌な予感がしたのだ。

もちろん家族には黙って出てきている。

着いた先は公園、俺が住んでいた場所ではないが街外れにある少し大きな公園だ。

そこでは肌の白いヒョロヒョロの男が公園でクモのように糸に張り付き何人も女性の体を切り刻んでいた。

ほとんどの者が目隠しをされ、両腕両足を斬られ、涙を流しながら死んでいた。

「……………なにものだ？」

やはり俺はおかしい、死体やなんでこうなっているのかよりもまず最初にこの男のことが気になったのだから。

「おやゝ？ おかしいですね、こんなところに子供が……まあ良いでしょう」

男は空中に張ったクモの巣のような場所から飛び降りて俺に向かって名乗りを上げる。

「私の名はサルバ、あなたは？」

「俺の名は迅、ところで聞くが…そのやつらはお前が？」

顎で吊るされている女性たちを指すとサルバは何がおかしいのか笑い出した。

「ははははは！ ええ、そうですね。私の趣味とでも言いますかね」

「下種な趣味だな」

吐き捨てるように言ってやる

「よく言われますよ、まあ言われたら――」

サルバの目が冷え切ったと思ったら

「――殺してしまうんですがね」

一気に俺を殺さんと迫ってくる無数の糸、なるほどな。

「――あまり舐めないでいただきたいのだがね」

瞬間、全方位から襲ってきていた糸が切り刻まれた。

「……………は？」

「なにを驚いているんだ？ 君もその気になれば似たような…ああ、済まない。君の聖遺物は糸だったか」

「な、なにを？」

「なに、“活動”を発動したのさ。もしかして知らないのかね？ 見たところ“形成”は出来ているみたいだが」

「なんのことだ！！ 活動？ 形成？ 一体、一体それはなんのことなんだ！！」

「知らないのならばそれで構わんよ、さて君が喰らった魂も俺の物としようか」

魂を回収するつもりも今までなかったがこういう下種からなら別に構わん。

「安心したまえ、別に殺すわけではない。俺の中で永遠に生きろ」

「ふざh b c kじゃ B S Z V C I K A N S c k l s ん v c ・ あん v s ・ ！ ¥」

サルバが何かを言い終わる前に俺は“活動”で切り刻んでやった。

「ほう、戦場でかなり稼いだようだな……ざっと一万近くは吸収している」

それでも少ない方だね。

俺は辺りを確認し、死体の処理をして、もうなにもないと確認すると家に帰った。

すると玄関から外に走り出ていくのはが見えた。

「あの慌てよう、ただ事ではなさそうだが……」

玄関の前で俺はなのはの背を見送っていると中から兄さんが出てきた。

「迅！ 今、なのはが……！」

「ああ、なにやら凄い慌てていたな」

「どっちに行った！」

顔が近い、俺にそういう趣味は無い。

「兄さん、ここは任せてもらいたい。俺が連れ戻すから兄さんはなのはが帰って来た時のお説教役にでもなってくれ」

「あ、ああわかった。すまないこちらでも冷静さを失っていたようだ」
シスコンだからな

「では行ってくる」

その気になれば一瞬で追いつけないこともないのだが俺は兄さんの前だし普通の人間よりも少し早いぐらいの速さで走る。

さて、なにが起ころうやら。

未知のことが起きてほしいと切に願いながら俺は走った。

episode ? (後書き)

聖遺物でなにか良いアイデアがあつたら教えてください。

さて、今回はやられ役のサルバ君でしたね。

自分の意図としてはこいつはすぐにやられたけども今後、どういう風にも扱える存在だと自分は思っています。

ある意味、伏線とでも言いますかね？

とにかく今回はここまで！

感想お待ちしております。

episode ? (前書き)

どうも皆様、こんばんわ

さて、今回はあまり話が進みません。

Diesの原作を知っている方は分かりますが獣殿

この人の話がたって案外難しい。

しかも実は設定とかあんまり決めてないし

こりゃあ、やべえな

episode ?

俺が着くとなのはがなにやら変身をして思念体と呼ばれている存在を拘束していた。

「（ふむ、これはカールが言うところの魔力というやつかな？）」

なのはから約百メートルは離れた地点から俺は見ている。

周りの人間が言うには俺の存在感って半端がないらしい。

まあ、俺の中にはさっきの一万も含めて

■ は居るからな。

魂だけの多さで言えばカールと並べる。

なので気づかれないとは思っているが念のために距離を開けているのだ。

既に人を辞めてしまっているこの身、百メートル先に居るなのはが鮮明に映るし声もはっきりと聞こえる。

「ジュエルシード???封印!」

そうなのはが叫ぶと思念体であつた異形の物が宝石となって杖の中に吸収される。

あの杖は聖遺物か？ いいや、それとはまた違うようだ。

しかし、これほどまでのことも既知とは……

いいや、気にするのもあまり良くない。

俺は曲がり角に隠れ、タイミングを見計らって出ていくとしよう。

はあ、兄としての人生も存外に疲れるな。

なのはside

「ふええええ、ごめんなさーい！」

パトカーの音がして私は走り逃げる。

少し、ほんの一分ぐらい走って家の近くの公園に着いたら、あの感覚が私を襲ってきた。

「なのは！ 気を付けてなんかいるー！」

ユーノ君が声を上げて警戒しているけども安心してほしいの。

「大丈夫だよユーノ君」

これは危険なものじゃないの。

振り返るとゆっくりと歩き寄ってくる迅お兄ちゃんが居たの。

「夜のお散歩か？ にしては疲れているようだな」

言葉一つ一つが重みって言うか威圧感がある。

「ねえ、迅お兄ちゃん。なんか夕方よりも存在感が増してない？」

「そうだろうか、自分としてはあまり自覚はないのだがな」

絶対そうだよ、だって私だって一瞬ビクリしちゃったんだもの。

でも、これでも抑えてるんだよね。

気配を常に隠そうとしてもこの存在感

やっぱり迅お兄ちゃんは凄いよ。

「それよりもだ、はやく帰ろうか」

「うん！」

「そのフェレットもかな？ どうやらその子がお目当てだったらしいしな、具合が悪そうだが大丈夫か？」

「ふええ！？」

ユ一ノ君が凄い汗を掻いてるの！

「少し当てすぎたかな？」

ああ、なるほど納得したの。

初対面で迅お兄ちゃんの目を真正面から見ちゃったからか。

今思えば、最初会ったあの頃より迅お兄ちゃんって色々と増してるの。

私は迅お兄ちゃんと一緒に帰った、帰ったら私はお兄ちゃんに、迅お兄ちゃんはお父さんに怒られちゃったけども。

s i d e o u t

ユーノは家で飼うことが決定された。

なのは喜んではいでいる。

見たところ、賢いようだし、食べ物に被害を与えるようなことはないだろう。

さて、なのはが学校に行っている間

ユーノの世話をしていた。

世話と言っても餌を与えてそのまま部屋に野放しにしているだけだが。

椅子に座り本を読みながら俺は考えていた。

ユーノが先程から俺を凝視してきている。

だがやはりか、俺の存在に抵抗があまりなく調子が悪そうだ。

いつも一緒にいる高町家の家族でさえ俺が気配を抑えなければ警戒態勢に入られてしまうのだ。

まあ、なのはだけはいつも通りにしてくるんだがな。

ある意味でそれが未知なのだがやはり既知であつた。

他に俺を恐れない存在など……ああ、カールが居たな。

確かに前例が居たのならそれは既知だ。

ともかくだ

「ユーノ、どうした？　俺が恐いか？」

俺が視線を向けるとユーノが硬直したかのようにビクリと震えて動かなくなる。

「別に恥じることはない、大抵の人間は俺を見て恐れたりするからな」

そう考えると翠屋に来るお客は凄いな、俺が普通に手伝っていても平然としているんだから。

もしかして翠屋にはなにかそういう魔力があるのかもしれないな。

「ああ、それと遅れたが昨日はお疲れ様。俺も、母さんのあれは何度も体験しているから疲れるのはわかるよ」

「きゅー」

なんとなくだが俺とユーノの間に絆っぽいのが生まれた気がする。

「そうだ、俺はちょっと用事があるので少々出かけるが……ユーノはどうする？」

しばらくユーノは考えて

「きゅ」

「ははは、まあ俺と居ても疲れるだろうな。では留守番は任せた」

結局ここに留まるつもりらしい。

俺としても居ないほうが好都合だったのでそのままにしておく。

さて、今日は神社へと向かうか。

episode ? (後書き)

いかがでしたか？

ちなみに結構、存在感のことを言っていますがわざとです、仕様です。

しつこいようでしたらすみません。

容姿とかにもあまり触れていないので近いうちに設定とか書いてみようと思います。

では、感想お待ちしております！！

episode ? (前書き)

同日投稿

今日に行けるところまで連続でやってやるじえい!!

episode ?

今日は手伝いも無い日だったので俺は街を見て回ることにした。

それこそ公園暮らしの頃にも見て回っていたのだが改めて見て回る。

以前の物語では俺は傍観者だった……らしい。

大まかに、流れぐらいしか知らないが

藤井蓮が流出へと至り、ラインハルトが既知感から^{ゲット}抜け出して、マリイが世界を包みこんだ。

傍観者である俺はそれを大まかな知識として知らないが獣殿が羨ましく思える。

ああ、未知とはどういう気分になるのだろうか？

カールは並行世界と言っていたな、“あちら”のカールもラインハルトと同様に抜け出したらしいがこちらのカールは未だに抜け出せぬ。

かと言って俺は獣の代わりの役でもなさそうだし。

とにかく俺はこの物語がどういうものか分からんのだが、聖遺物の所持者達を考えると――

「正直、この世界に聖遺物使いは少ない…それに加えて皆、なにも

知識がない」

今まで戦ってきた聖遺物使いは数人居たが誰もが“形成”あるいは“活動”までしか使えなかった。

おまけに“聖遺物”の何たるかまで知らない始末。

魂の吸収だけは聖遺物が勝手にやってくれるので出来ていたみたいだがどうにも使い手の渴望が足りんな。

聖遺物と使い手が進化する条件は二つ

“魂”と“渴望”

この二つがなければいつまでたっても“創造”までは辿り着けん。

良質の魂を数万、または悪質でも最低でも数十万吸わねばならん。

同時に自分の一番の渴望を狂うほどに願わねばならない。

話が逸れてしまっていたな。

とにかく今日は霊地を探索しに来ていた。

獣殿も黒円卓もスワスチカもないのだが霊地の存在は無視できぬ。

仮に、そこで聖遺物の所持者が暴れ大量虐殺したり、戦闘を行ってしまったら些か面倒くさいことになってしまう。

だが、カールがそれを良しとしないだろうがね。

その霊地の一つが神社

ここが一番この街で霊格が強い場所だ。

「む、なるほどな。ここは昔はそうだったのか」

神社の鳥居を潜った瞬間、俺は何かを取り込む感じがした。

ここは戦国時代あたりから激しい戦地だったようだ。

怨念たちが沢山いる。

それを俺の聖遺物が勝手に吸い上げてしまうのだ。

ここに神社が出来た理由としてはここにいる怨霊達が外に逃げず、中でも暴走しないように抑えるために作られたのだろう。

だが今日で俺がその魂を全て喰らってやろう。

なにも本人はしていないのに強くなっていく、それは一向に構わないのだがこれはまたなのは達になにか言われるな。

魂を吸うことはそれだけ俺の魂を強化…この場合は存在感とでも言ったほうが解りやすいか。

とにかく俺はまた威圧感が凄くなったというわけ。

「……………帰るか」

そう思った矢先、神社が青い光で包まれた。

この感じ、昨日も

鳥居の近くで一人の女性が倒れ、大きな獣が吠えていた。

いま、探索をかけてみたが、なのはが来るまで五分少々

丁度良い、準備運動ついでに時間を稼いでやろう。

なのはside

「なのは、レイジングハートを！」

「うん！」

私は階段を駆け上がりながらユーノ君に言われた通り、ネックレスのようにしている紅い宝石——レイジングハートを手に持つ。

そのまま階段を上り切って神社に着くと血を流している大きな黒い
ななにかが居たの。

「幻獣生物を取り込んでる」

「どうなるの？」

ユーノ君が不安そうに呟いてるの。

なにか大変なことがあったのかな？

「実体がある分、手強くなってる」

「大丈夫…多分」

私は目の前で吠えている怪物にも怖気ずに自信満々に答える。

「なのは、レイジングハートの起動を！」

「ふえ、起動つてなんだっけ？」

あれ？

なんだっけ、確か昨日なにか言ったような気がするの。

そっこうしている間に怪物は走ってきている。

「『我は使命を』から始まる起動パスワードを！」

「ふええええ！ あんな長い覚えてないよ！！」

着実に迫ってくる怪物、でも怪我をしていたせいか少しだけ挫けた。

「もう一回言うから繰り返して！」

それを見逃さなかったユーノ君が私の耳元で言ってくるの。

「わ、わかった！」

でもやっぱり間に合わず、怪物は私に跳びかかってきた。

目を瞑ると、大好きな迅お兄ちゃんが出てきてすぐに私は目を開けた。

「レイジングハート!!」

そう叫ぶと手に握っていたレイジングハートが桜色の光を出し始めた。

「Stand by・Ready」

次に私の体が光に包まれ

「set up」

そうレイジングハートが言った瞬間、レイジングハートは宝石ではなく杖となっていた。

「パスワードなしでレイジングハートを起動させた!？」

怪物はそんな私を警戒したのか様子見をして、いきなり私に跳びかかってきた。

「なのは、防護服を!」

「え、あ、はい!」

「Barrier Jacket」

バリアジャケットに包まれたと同時に私と怪物は衝突したのであった。

side out

ユーノside

「疲れた」

そう言っただけなのはベットのダイブする。

「今日はすごかったよ」

まさかあんなに手際よくできるなんて思わなかったし、やっぱり素質があるんだな。

「ねえ、なのは聞いて良いかい？」

「な〜に〜、ユーノ君？」

「なんで今日、あの時目を瞑ったと思ったたら急に目を開いてレイジングハートの名を呼んだの？」

それが今日の疑問の一つ

もう一つはなんであのジュエルシードを取り込んだ怪物が怪我を負っていたかだけだ

「目を瞑ったらね、迅お兄ちゃんのことを思い出したの」

「迅…あの人のことか」

一目でわかる、普通の人間とは圧倒的に、何もかもが違つと

初対面の時、あの人の目を見てしまったら不甲斐無いけど息すらもできなかった。

いいや、今でもそうだ。

お昼時に『ユーノ、どうした？ 俺が恐いか？』

と言われて僕は硬直してしまった。

言葉にではない、意識して見ただけで硬直してしまったのだ。

『別に恥じることはない、大抵の人間は俺を見て恐れたりするからな』

そう言つた迅さんは悲しむでもなくごくごく普通に答えた。

それからすぐに出かけてしまったけどもしばらく動けなかった。

「うん、迅お兄ちゃんって威圧つて言うのかな。とにかく凄いよね」

それは同感だ、あれほどの威圧なんて他に知らない。

「お兄ちゃんに比べたら、あれぐらいならなんとも思えなかったの」

「まあ……………そうだね」

なるほどね、納得だ。

「怖くなくなったら今度は逆に迅お兄ちゃんが背中を押してくれて
るみたいな感じになってえ」

そこでなのはは寝てしまった。

今はぐっすりと寝かせてあげよう。

s i d e o u t

episode ? (後書き)

ただいま、ユーチューブでアニメを見ながら原作に一応はなぞりながらもどつやっといじくっていくか考えております。

episode ? (前書き)

同日三作品…俺はまだやってやるよ！

episode ?

平凡な小学三年生だったはずの私、高町なのはに訪れた突然の事態

渡されたのは紅い宝石、手にしたのは魔法の力

出会いが導く偶然が今、静かに動き始めて――

立ち向かっていく日々には俯かないように

魔法少女リリカルなのは、始まります！

さて、突然だがここで説明をしておこう。

聖遺物を操り魂を喰らうものをエイヴィヒカイトと言う。

聖遺物を操るエイヴィヒカイトには、熟練度に応じた“活動”“形成”“創造”“流出”の四つの位階がある

ここでは活動位階について説明しようか

“活動”とは聖遺物の特性を生身に乗せる基本中の基本

俺の聖遺物は…今後お見せするとして、以前にあの三流の糸を切ったのはこれのおかげ。

俺のは結構便利で全方位に向く。

“形成”より先は後々に話していきたいと思う。

「どうやら、終わったようだな」

学校の屋上にいた俺はなのはが戦い終わり、青い宝石を封印したのを確かめてかなりの距離を取りながら尾行する。

悪いがこれも父さんからの命令でね。

だがなのは、安心すると良い。

魔法とやらについては誤魔化しておいているから。

今日は父さんがコーチ兼監督をしているサッカーチームの試合で居ないので翠屋は母さんと姉さん、バイトの若い人が何人かで切り盛りしている。

俺も手伝いで昼頃まで手伝い、今は暇をしていたので図書館まで来ていた。

神話の本を探す為に俺はその類の本が置いてあるコーナーに向かう

と車椅子の少女が居た。

頑張っ て手を伸ばしているが届かずにいる。

仕方がない、手伝うとしよう。

「これか、君が取ろうとしていた本は？」

「え！？」

「北欧の神話か、なかなか興味深いな」

それ以上に初対面で俺の目を真正面から見て驚きぐらいしかないこの少女の方が興味深いが

「あ、ありがとうございます」

「いやなに、困っていたようなのでついね。それとそんな畏まらなくても良い、もっと砕けた感じで話してくれて結構」

「お、お兄さんだって砕けた感じで良いですよ？」

前言撤回、驚いているだけではなく恐怖もしているようだ。

良く見れば手が小刻みに震えている。

「これは済まない。もともとこれが素の喋り方だね。直そうとは思っているのだが案外口調を変えらというのは難しいのだよ」

「そ、そうですか」

だがしかし、声や体は震えているもののよく顔に恐怖を出さないものだ。

「ふむ、気に入った」

「え？」

俺の言葉が理解できていないのか、再度言う。

「君のことが気に入ったのだよ、名前は？」

力を抑えるのをやめて、顔を覗き込むように近づけたら涙目になり、表情も泣きそうな顔になってしまった。

「ひ、人に、名前を、き、聞く、聞くときは、自分から名乗るもん
じゃないかな？」

しかし、口から出てきた言葉は俺に対する反論

「くははは」

思わず、口から声が漏れる。

[illegible]

!

ここが図書館だということも忘れて俺は声を上げて笑い出す。

幸い、ここは図書館の奥の方だし、お昼時ということもあって人は

居ない。

「いや失敬、しかし、本当に忌々しい！ 私が知る限り、ここまで威圧を掛けて反論してきたのは君が最初だというのにこれも既知だった！ いや、これは新たな出会いの為と甘受するでしょう！」

既知が口惜しい、忌々しい、だがこの少女は面白い。

「俺の名は高町迅、君は？」

「えっと、八神はやてです」

「八神はやて… 良い名だ」

その名前を噛みしめるように何度も口の中で復唱する。

「よろしければ、友になってくれないか？」

心からそう願った。

カール、どうやらこの物語には俺を楽しませられるような存在がいるようだぞ。

「——私なんかで良いん？」

「俺が友になろうと言った人物が“なんか”とは言ってほしくないな」

俺がそう言ったら、なぜかはやては泣き始めてしまった。

「うち、嬉しいねん。今まで友達が居らんかったから」

「では俺と友になってくれると?」

「……うん」

迅はまだ知らない、後にこの少女が闇の書の主になるということ。

「いや、なにからなにまですまん」

「なに、友が困っているのだ。これぐらいのこととして当然」

俺は車椅子を押しながらはやてのことは見る。

友になってくれと言った後、俺の目を見てもう一度威圧を掛けてみたが恐怖の欠片も目に映らなかった。

こんなことカール以来だ。

やはり、俺の友になるのならこれぐらいでなければな。

「家まで送り届ければいいのだな?」

「うん、それでけっこうや」

では、我が友を丁寧に送り届けるか。

episode ? (後書き)

書いてて気が付いた

主人公がなのはの家族と全然絡んでない

でも良くなっていう自分が居る。

episode ? (前書き)

はっはぁー！

やべえっすよ、もうこれで何回目の更新だ？

このまま無印編を完結させちまうのも悪くはねえかもよ！？

episode ?

はやてを家に送り、日が暮れるまで世間話をした。

それなりに有意義な時間だった。

帰り道、コンクリートでできた道や壁がめちゃくちゃになっていた。

これはジュエルシードとやらの影響か？

この規模になると俺の聖遺物でも確かに可能なのが二つあるが誰か他人が聖遺物を使った気配はなかった。

となればジュエルシードしか現状としての可能性はあるまい。

街がこのようになってても驚きはしない。

悠々と俺は街を歩き、目の前のビルの上に向かう。

ここから六百メートル先の海上に危険分子らしき気配を感じた。

いつもなら放っておくが友と家族がいる街に被害を出そうとする者がやってきたのだ。

加えて今日は機嫌が良い。

「おや、先客がいたか」

「「っ!？」」

ビルの上に着くと黒い服を着た少女と赤い毛並みの犬が居た。

「そう身構える必要はない、俺はこの街に被害を出そうとしている危険分子を排除しに來ただけだ」

警戒を解かずに戦闘態勢で杖の先を俺に向けてきている少女達に――瞥くれ俺はここから狙いを定める。

先程も少し話に出てきた都市規模の攻撃が出来る聖遺物、その一つをお見せしよう。

「少し離れていたまえ、火傷をしても知らんぞ」

俺の背後に紅蓮の魔方阵が浮かび上がる

そしてこの魔法陣は魔砲の砲口、両者の距離はざっと六百メートル以上

問題ない、射程圏内だ。

「Yetzirah（形成）――」

イエツラー、それは形成位階の聖遺物を呼び出すための呪文

弾ける魔性の大放火、海へと着弾と同時に半径百メートルが紅蓮で燃えた。

「Der Freischutz Samuel（極大火砲・狩獵

の魔王)——」

デア・フライシエス・ザミエル

それが紅蓮の赤騎士の形成の名だった。

しかし、それがどういった形の聖遺物なのかの全貌はまだ見えていない。

「す、すごい」

「なんだい、この魔法。めちゃくちゃじゃないか」

それはそうだろう、俺でさえ広範囲大火力で言えば堂々の一位に君臨する代物だ。

焼き払った相手が喰らった魂は聖遺物へと流れ込んでくる。

ふむ、こいつも一万弱か

「害虫は焼き払った、その二人」

ビクリと体を跳ねさす二人

「恐がらなくても良い、君たちは俺が思っている害虫とは違うようだし襲わんよ。ようこそ小さな魔法使いとその使い魔殿、海鳴は君達を歓迎しよう。この街で何を成すかは君達次第、是非にも頑張ってくれたまえ」

そのまま白騎士の活動位階である“神速”で去ろうとした時

「ま、待って！」

不意に金髪の少女に呼び止められた。

「なにかなお嬢さん？」

「私の名前はフェイト・テストロッサ、こっちは使い魔のアルフ、あなたの名前は？」

これはこれは、気配を最大限に抑えているからまだここまで滑舌が回るのか。

では一つ、抑えを無くしてみますか。

「あっ」

「あああ」

尻餅について俺を見上げる一人と二匹

俺ってそこまで凄いのだろうか？

「俺の名は迅、高町迅と言う。では今度こそ、頑張ってくれたまえ」
今度こそ“神速”で一気に闇夜に飛び込む。

空は飛べねど、駆け抜けよう。

新たな来訪者への福音とともに。

フエイトside

「う、——はあ、はあ」

なんて人だったの

「だ、大丈夫かい、フエイト」

「ア、アルフ、こそ、大丈夫？」

なんだったんだろう、あれは？

大火力の魔砲もそうだったけどあの人自体が人間としての規模が違
うように感じた。

あの人のことを知りたい。

side out

episode ? (後書き)

バイト終わって、帰宅してから寝てない。

否、なぜか眠れない。

ゆえに、今の俺は最高にハイってやつだ

episode? (前書き)

結局、次の日に登校しちまった。

俺は無力だ！

そんな話はさておきながら、大変なことに気が付いた。

俺の携帯とPCで『魔法少女リリカルなのは』ってタグから検索してもこの作品が出ないぞ！？

いったいどうしちまったんだ！！

episode?

なのはside

きっかけは、きっと偶然でした。

だけど、いろんな偶然をいくつも重ねて、その中から自分の道を間違わないよう選んでいつて

みんな、そうやって過ごしていくものだと思うから――

偶然で始まったこの日々も……だから私も、間違えずに進んで行きたいと思う。

自分の意志で、自分の想いで

さて、日本国内は全国的に連休です。

喫茶『翠屋』は年中無休ですが連休の時などはお店を店員さんたちにお任せして、ちょっとした家族旅行に出かけたりもします。

今回は、なのはのお友達一同と、お兄ちゃんとその彼女さんの月村しのぶさん、そして月村さん家のメイドさん達も一緒です。

近場で二泊、のんびり温泉に浸かって日頃の疲れを癒そうという高町家の家族旅行としてはいつものプランです。

『なのは、なのは！』

前の席でお姉ちゃんの肩に乗っているユーノ君から念話が届いた。

『なのは、旅行中ぐらいはゆっくりしなきゃ駄目なんだからね』

『わかってるよ、大丈夫』

先週であった、真つ黒の魔法使いの子と、あれから一つも見つけられていないジュエルシードのこと

色々考えすぎちゃってるから、少しゆっくりお休みするようになってユーノ君のお勧めもあって……

とりあえず、この二日間はなのはも年相応にお子様らしく――

「どうしたのだ一人で、みんな中に入って行ってしまったが？」

「ふええ！」

慌てて振り返ると五メートル先ぐらいに迅お兄ちゃんが立って居た。

あれ？ 今、耳元で話しかけられたぐらいに感じたんだけど

「はやくいくぞ」

「あ、待ってよ」

相変わらず、迅お兄ちゃんの背中って大きく見えるな

あの雰囲気も怖がる人が多いから頑張って抑えてみてるみたいだけ
どやっぱり目立ってるよ。

だって迅お兄ちゃんがあるくと自然と前の人が退いてくれてるし、
やっぱり凄いの。

迅お兄ちゃんの近くにいと安心するし、結構優しいし、私はお兄
ちゃんが大好き。

でもお兄ちゃんは呪いみたいなのにかかっているの。

既知感、生まれてからそれが何やっていても起きちゃうらしいの。

魔法を見せてみれば解かれるかもしれないけど、下手したら巻き込
んじゃうし

迅お兄ちゃんにはいつも助けてもらっているんだからこれ以上は迷
惑を掛けられない。

とまあ、迅お兄ちゃんの膝の上で考えてる自分にそんな説得力がな
いのは自覚しているの。

でも、仕方がないことなの。

迅お兄ちゃんが胡坐掻いてたらそこに、膝の上に座って私の頭が

そう言うんだもん。

アリサちゃんとすずかちゃんはまだ池の鯉を見てたし、もうちょっとだけ甘えられるかな。

胸に頭を擦りつけてみる。

迅お兄ちゃんはちょっと困ったように、でもほとんど表情を変えず、優しく頭を撫でてくれた。

にやゝ、気持ちいいよ。

さりげなくユーノ君にもクッキー渡してるし、優しいね迅お兄ちゃんは。

「ああ！　なのは、居ないと思ったら迅さんと一緒に居たのね！」

むう、もうちょっと甘えてたかったけども仕方がないの。

「私も、迅さんに甘えよ」「そうだ、お風呂早く行きましょうか。なのは！」「うん、アリサちゃん！」「酷いよ二人とも」

すずかちゃんがお兄ちゃんに甘えようとしてたから即座にアリサちゃんと連携してお風呂に連れて行くの。

アリサちゃんもすずかちゃんも、迅お兄ちゃんに甘えたいみたいだけれどもそうは行かないの。

迅お兄ちゃんは私の物なの、私を一番愛してもらうんだから誰にも渡さないの！！

知らぬ間に、迅は将来の魔王にヤンデレフラグを建てたっぽかった
のであった。

side out

俺は足湯があつたのでそこで足湯に浸かり、しばらくしてから温泉
に入るべく男湯へと向かった。

すると途中、見覚えのある“魂”をした女性が居た。

「あれは、このまえの使い魔……アルフと言ったかな？」

なにやら俺の妹とその友にちょっかいを出しているようなので躰を
せねばな。

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見えー

」

最後まで言い切る前に俺は一步踏み出す。

「知り合いかね、君たちは」

勢いよく振り返るアルフ、こいつの目には俺がどう映っているの
であろうな？

「い、いいや、あはは、ちよいと昔の知り合いに似ていたもんです」

「そうか、知り合いは大事にせねばな。特に昔の知り合いともなる
と特にだ」

「そ、そうだね。それにしても可愛いフェレットだね。」

ぐりぐり、とユーノの頭を撫でるアルフ

「じゃあ私はもう一風呂浴びてくるかな」

「では俺も、丁度女湯の隣だしな男湯は」

そのまま一緒に俺らは歩き出す。

『今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。お痛が過ぎるとガブツと行くわよ』

別れ際、そう念話でなのはにアルフが伝える。

曲がり角を曲がり、なのは達から見えなくなるとアルフが壁に寄りかかって話しかけてくる。

「なんであんたがここにいるんだい？」

「なんでと言われても…旅行だな」

「旅行？」

「ああ、別に君達にワザと会うために来たわけじゃない。それこそ偶然だ。だがしかし…君が居るということはかならず彼女も。ジュエルシードと言ったかな？ あれがここにあるのか？」

「なんであんたがそれを！」

「おや、カマをかけてみたら思いの他当たってしまったな」

今まで確証がなかったので断言できなかったがこれで確定だな。

「まあどうでも良いさ、集めるのならば好きにすると良い。そちらから襲ってこなければこちらからも襲わない」

俺はさっさと風呂へと向かう、後ろでなにか言っているようだが無視をした。

フェイトside

『あー、もしもしフェイト？　こちらアルフ』

私が木の上でジュエルシードの気配を探しているとアルフから念話が入った。

『ちょっと見て来たよ、例の白い子』

『そう…どうだった？』

『んー、まあどうってことないね。フェイトの敵じゃないよ』

『そう、こっちも少し進展。次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できてきた、今夜にも捕獲できると思うよ』

『ナイスだよフェイト、流石は私のご主人様！』

『ありがとう、アルフ。夜にまた落ち合おう』

『はい。あ、そうだフェイト』

『なに？』

心無しかアルフの声が不安そうだ。

『気づいてると思うけど――』

『ああ、うん……彼が居るんでしょう？』

一瞬、一瞬だけど旅館全体の空気が変わった。

その重圧は間違いない、あの化け物のような少年だと感じて分かった。

『大丈夫だった？　ここに居てもかなり苦しかったけど』

『死ぬかと思ったね、一秒もあの重圧を感じてないのにあの瞬間が永遠に感じたよ』

『……あの人はなにか言ってた？』

『ここに来たのは旅行だって、こちらが攻撃とか邪魔しない限りはなにもしないから精々好きにしろだってさ』

良かった、もしあの人が敵になるんだったら私達が死んでたかもしれない。

『じゃあ、夜に』

『はい、フェイトもあまり無理するんじゃないよ』

そう言つて念話を切った。

あとである人のところに行こう、話をしてみたいな。

s i d e o u t

夜、なのは達が寝ていると大きな力が発動したのを感じた。

「っ!!」

なのはが起き上がり、急いで着替えて外へと出て行く。

あの黒い魔法使いとの戦いだろう、ここから傍観させてもらうつもりだろう。

なのは s i d e

ジュエルシードのところまで走っているとお空が光ったの。

「あれは」

封印したときの光…ということはあの黒の子が来てるの!?

早くしないと!

池のそばにつくと二人の女の人がいた。

「あゝらら、あらあらあら」

「あつ！」

「子供は良い子でって言わなかったけかい？」

さつき、旅館で私達に忠告してきた人なの。

「それを、ジュエルシードをどうする気だ！？」

ユーノ君が叫ぶ。

「さあね、答える理由は見当たらないよ
それにさあ、私親切に言っただよね？」

犬みたいな耳をした女の人はこちらをはつきりとした敵意を含んだ目をして睨んできたの。

「良い子で居ないとガブツと行くよって」

女の人が赤い毛並みの狼に変わったの！？

「やっぱり、あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔？」

なんなのそれって

「そうさ、私はこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で

生きる変わり命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

じゃあ、あの人（？）は黒い子を作ったの？

「先に帰ってて、すぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね」

このままじゃ逃げられちゃうの！！

「OK！」

赤い狼さんが跳びかかってきた。

どどど、どうしよう！

身構えると同時ぐらいに私の周りにバリアが張られたの。

「なのは、あの子をお願い！」

ユーノ君！？

凄いの、こんなことが出来るなんて予想外なの！

「させるとでも思ってたの！」

「させてみせるさ！」

バリアの上に魔方阵が現れて、次の瞬間にユーノ君と狼さんは消えちゃった。

辺りを見回しても居ないし……

ふええ！ どこ行っちゃたの！？

「結界に強制転移魔法、良い使い魔ね」

「ユーノ君は使い魔ってやつじゃないよ、私の大切な友達」

私がそう言つと、一瞬、一瞬だけど黒い子の目が揺らいだ。

私と黒い子は向かいあってお互いに動かない

なんで、なんでそんな悲しい目をしているの？

私はこの子を知りたいと思った。

s i d e o u t

ユーノが予想以上に頑張っていたがどうやら無駄そうだな。

俺は観戦をやめて浴衣のまま外に出て行く。

予想ではこのままゆっくりと歩いていけば丁度良いぐらいに着ける
と思っっている。

結果はなのはの負けだろう。フェイトは見る限り、結構な戦闘経験を積んでいるに違いない。

それを魔法使いになつて一ヶ月もしていないのはが追い越せるほど、数も密度の濃さも経験してはいない。

俺が向かっている途中、激しい閃光がした。

やはりというか、なんというか。

到着してみると、夜空を見上げてなにかを考えているのはが居た。

今回の戦いで、なのはは何を思ったのだろうか。

e p i s o d e ? (後書き)

誰か俺の謎に答えてくれ!!

e p i s o d e ? (前書き)

いかん、完全にスランプだ

episode?

なのはside

はあ、最近迅お兄ちゃんとあまり会話できていない気がするの。

フェイトちゃんに旅館で負けて、呆然としてるところに偶然やってきた迅お兄ちゃん

思えばあの時に少し会話したぐらいじゃないのかな？

フェイトちゃんのこと考えててみんなとも碌に話せなかったし

フェイトちゃんには負けてるけど今度は負けないために迅お兄ちゃん成分を摂取しなきゃ。

よし、決めた！

旅館から帰って、みんなが寝ちゃった頃

私はベットから起きて、迅お兄ちゃんの部屋に向かう。

「おじゃましてす」これは本当は必要ないんだけど形式美ってやつなの。

迅お兄ちゃんの部屋は基本的にあまり物が置いていないの。

頭が良くて、本とかも全然置いてないし、学校に行っていないのになんでそんなに頭が良いんだろう？

こっそり、こっそりとベットに近づく。

そーっと顔を覗くとちゃんと寝ていることがわかったの。

長い、腰まで伸ばした黒い髪

普段はポニーテイルみたいに纏めていて、下手したら普通の女の人よりも綺麗なの。

でも決して間違われることはない。

ううん、間違う以前の問題なの。

私が最初に会った時もそうだったんだけど、迅お兄ちゃんはそれこそ“化け物”って言われてもおかしくないの。

うまくは説明できないけども人としての密度が違うの。

日常ではなんとかその存在か威圧がよくわからないけどそれを抑えている。

じゃなかったら、迅お兄ちゃんの周りに立ってることすらできない。

膝をつき、頭を垂れ、息をすることすらままならないの。

一度、それを経験したからわかるの。

でも完全に抑えをなくすなんてことはまったくしないの。

違う、正確には出来ないの。

一昨日の旅館で、アルフさんに話しかけられてきた時も一瞬だけ解放したけど完全じゃなかった。

これも不思議の一つで、たまに朝と夕方とかで、一日も経ってないのにまた迅お兄ちゃんが濃くなっているの。

密度が増えたって言うのかな？

とにかく、不思議なことなの。

だから以前に開放した時よりも絶対に半端がなくなっているの！

迅お兄ちゃんの目を真っ直ぐに見て会話できる人も高町家ぐらいしか私は知らない。

あとはたまに話に出てくる迅お兄ちゃんの友人二人かな。

おっと、考える前に早く布団に入ろう。

ゆっくりと毛布をめくって私も一緒に中に入る。

うーん、やっぱりここは落ち着くの。

お友達とか家族とかもいるけど、やっぱり一番はこの人

誰よりも圧倒的で、誰よりも弱弱しくて

誰よりも恐ろしくて、誰よりも優しくて

誰よりも気高くて、誰よりも醜くて

誰よりも狂っていて、誰よりも冷静で

常に孤独だけでも私が世界で一番好きな人。

ずっと、死ぬまでこの人と共に歩み続けたい。

この人の隣で、同じ景色を見てみたい。

魔法の力を手に入れて、最近思ったの。

この力さえあれば私はこの人についていけるかもしれない。

でも反面、力を手に入れてしまったことで恐れていることがある。

見捨ててほしくないの、この世界の普通の人じゃない力を手に入れて
迅お兄ちゃんに“化け物”扱いされてほしくないの。

仮にされなかったとしても、もしも私がついて行けずに遙か彼方の
先に行かれてしまったら――

ギュッと迅お兄ちゃんの服を握って抱きつく。

ずっと一緒に居たいの。

side out

カールよ、些か助言を願いたいのだが？

と言っても、今はカールが居ないのでこの問いかけは意味がないのだが。

兄さんの怒り度が尋常ではない。

俺にとって怒りは甘美なものであるが身内から向けられる怒りは好きではない。

怒っている理由はわかるのだが俺にはどうしようもないので困ったものだ。

「なのは、なんで迅の膝の上で迅に朝食を食べさせているんだ？」

そうだ、今朝の布団に入ってくる行為は度々…いや、ほぼ毎日だから気にはしなかったが

既知感に襲われつつも俺はなのはが幸せそくに箸を運んでくるので仕方なしに食べる。

そつ、怒らないでいただきたいな兄さん。

不可抗力なのだ。

「兄さん、食事時なので殺気は収めてほしい。なのはが怯えている

ぞ」

「はっ!?!」

今この時、俺に殺気をぶつけるのはなのはにも殺気をぶつけているのと同義

「お兄ちゃんなんて大嫌い!!」

「ガハッ!」

落ちたか、兄さん

「はい、迅お兄ちゃん」

「うむ」

やはり母さんが作った料理は美味いな。

「ねえねえ」

「なにかね、姉さん」

俺がなのはに食べさせてもらっていると横から姉さんが話しかけてきた。

「一度、今日だけでいいから喋り方変えてみない?」

「喋り方?」

「うん。あつ、でも大きく変えるんじゃないかってちょっとだけね」

曰く、人を呼ぶ時の言い方を変えろとのことらしい。

俺ではなく私

お前ではなく卿

姉さんではなく姉上

その他も、多少なりとも変えないかとのことらしい。

なのはや姉上、兄上を学校へと見送り私ははやての家に向かう

旅館のお土産も渡さねばなるまいしな。

「久しぶりだな、はやて」

「二日ぶりやな。寂しかったんやで、うちの身体を慰めてくれる愛しの旦那がおらんかったから」

「やれやれ、以前よりも元気そうだなによりだ」

ちなみに姉上に言われた話し方をしたところ

「なんや、正にラスボスの大魔王って言われても信じてまうぐらいピツタリやで」

とはやてに驚かれた。

余談ではあるが姉上の部屋から「絶対魔迅の調教術」という本が発見されたが見なかったことにした

e p i s o d e ? (後書き)

次回はみんなが大好きなあのKYの登場です

episode ? (前書き)

みんな来たぜ、アースラの切り札が!!

episode ?

魔法使いの闘いが始まるのは大抵が夜だ。

今回もそのようで私は遠く離れたビルから二人の少女の戦いを見ていた。

「なんで追ってくるの？」

フェイトがなのはへと振り返る

なのはも止まり、フェイトを見据える

「私はね、別に争うつもりはないの」

淡々と言葉を繋いでいく

「世の中には人の数だけのお話があつて、事情がある」

目を瞑り、なにかを思い出すように喋る

「フェイトちゃんはどうしてもジュエルシードを集める理由があるんでしょ？」

「うん、なにかは言えないけど」

「今はそれで良いの、でもね私はフェイトちゃんとお話がしたいの」

「私にはない」

「私にはあるの、あなたがそんな悲しい目をしてる理由が知りたい
——そして、お友達になりたいの!!」

「友、達？」

「聞くなフェイト！ そんな暖かい日溜まりの中でのほほんと生きてきた奴なんかの言葉を聞くんじゃない!!」

アルフが叫ぶ、ユーノはなのはのセリフになにかを感じたのかジツとしている。

「これは私の勝手な言い分、だからフェイトちゃんが話しをしたくないんだったら」

なのはが構え、それに習うようにフェイトも構える

「力ずくでも聞いてないもらうの!」

私もこの決闘に手を出してみたくはあるがこれは二人の闘い

無粋な真似はせん

この魂と魂がぶつかり、混ざり合い奏でるハーモニー

実に心地良い

両雄が今、正に、決着を付けるべく踏み出そうとした時

「そこまでだ魔導師、戦闘をやめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ！」

互いに構え、歌劇が終幕へと向かっていくという時に二人の間に男が割って入ってきた。

いかなあ、これは流石に

少し躑をしてやろう。

三人称 side

「その魔導師、戦闘をやめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ！」

時空管理局、その言葉を聞いてフェイトは不味いと思った

「アルフ逃げるよ」

「あいよ！」

急いで振り返って逃げようとするフェイトだが

「逃がすか！！」

そこを狙われて後ろからバインドが迫る

捕まる！

この場にいる全ての人間がそう思った。

事実、完全に避けられないタイミングとスピードでクロノのバインドは放たれていた。

バインドがフェイトに当たる直前

ゾクリッ！！

全員の背中に寒気が走り、滝のように冷や汗が流れ出る。

なにか、なにか自分等の想像も出来ない驚異に見られているかのよう
うに

次の瞬間

「きやあああああああああ！」

「いやあああああああああ！」

「ぐわあああああああああ！」

フェイトとなのはの間

つまりはクロノへと黄金の閃光が走ったのだ。

それは“通り過ぎた時の爆風”だけで周囲を破壊し、クロノをビルまで吹き飛ばし、他の人間にも少なからずダメージを与えた。

『今のうちに逃げたまえ』

フェイトとアルフにしか聞こえない念話で二人は今度こそ急いで退散するのであった。

「ま、て、待つん、だ」

爆風でビルに叩きつけられたクロノはボロボロになりながらも立ち上がるが既に遠くへと去ってしまった後だった。

S i d e o u t

一言、興醒めだ。

まあ、これも一つの既知の結果だったのだが。

だが既知だからと言ってもこれは怒るべき既知

決壊を破壊したのを確認して俺は家へと帰る

しかし、今日の一件

妹相手に言うのもなんだがなかなか好みの女になった。

妹に恋をする趣味などないのだがアレ以上の女は我が友、はやてしかおらん。

友と言えばカールよ、卿との約束の日はいつになったら来るのである。
ろくな。

……なかなかこの喋り方も気に入ってきたな。

フエイトside

「アルフ、さっきのって」

私達はなんとか逃げ切って家に帰ってきた。

アルフとご飯を食べながら一緒に反省会だ。

「ああ、多分……いいや絶対にあいつの仕業だね」

あいつ——アルフの言うあいつって言うのは迅さんのことだ。

「迅さんが助けてくれたなら迅さんは味方なのかな？」

「違うだろうね。少ししか関わってないけどあいつはそんなタイプじゃないよ」

「じゃあ敵？」

だったらどうしよう

「一瞬、あいつが敵だったことを想像しちまったよ」

うん、地獄しかないね。

「それも違うと思う、違ってほしい。あいつは中立な立場だろうね……多分」

アルフったら自信ないね

迅さんの力見たらそうなっちゃうのはわかるからなにも言えないけど

「とにかく、次に備えてもう寝よう!」

「うん、お休み」

今度会ったらお礼言おう

S i d e o u t

プレシア s i d e

私は今、きっとこの数十年という年月の中で一番の危機に瀕している。

「やあ大魔導師、卿も一緒に紅茶でもどうかね?」

目の前には、10歳ほどの黒い髪を腰まで伸ばした少年。

私の命を狩るも狩らぬも自由のままに出来るだろう存在

「あなた、誰よ」

「私は高町迅、友人達からは“死神”などと比喻されているよ」

高町迅——人形の報告に恐ろしい存在とあった。

なるほど、これは確かに恐怖をしないほうがおかしいわ。

「死神とは、また陳腐な表現ね」

「ああ、私もそう思ったが我が盟友が語るには『究極に近づくほど、形容する言葉は陳腐になる』らしいぞ」

「それはまた、私のような研究者とは話が合いそうね。その盟友とやらの名前をお聞かせ願っても？」

「ヘルメス・トリスメギストス、魔術師としての彼の名だ。もっとも、彼の名はそれこそ数千と持っているらしいからな。私でさえ本当の名を知らん」

「ヘルメス・トリスメギストスですって!？」

「おや、知っているのか？」

知ってるもなにも、黄金鍊成をはじめとした禁忌の法術を作り上げた人よ。

なんでそんな人がこの子の盟友なんかに？

「それで、そのポットに入っている娘。此度のジュエルシードとやらの件に関わっているのか？」

「ええ、そうよ。この子は私の愛しい娘、生き返らせるためにジュエルシードの膨大な魔力が必要なの」

「死者復活を行うと？」

ま創造者が死んでなお残り続けた創造世界。そこは永遠の刻を永遠に刻み付けたまま残ってしまう場所だ」

「創造？ あなたはなにを――」

「そも、ヘルメス・トリスメギストスをもつてすら死者復活は出来ないと言っている。さらに卿は前提を間違えているのだ」

意味がわからない。創造？ 前提？ なにを言っているこの男は。

「そのポットの娘、死んでおらんぞ」

「なん、ですって？」

私はこの時初めて、この死神が神の如く神々しく見えた。

episode ? (後書き)

KY、俺はお前になにもしてやれなかった。

てなわけで、おはこんばんわ！

今回はKY……ゴホン、メインとして見ていただきたかったのはプレシアとお話です。

意味が分かんないですね、自分も分かんないすwww

次回は今回の話の前後を書きたいと思います。

ではみなさん、アデューー！！

episode ? (前書き)

あれだ、眠かった。

言い訳ではないが眠かった。

だから、今回はプレシアの一件について今後に支障がない程度に触れるぐらいしか書いてません。

2011年 4月18日 プレシアさんの席と設定を変えました

2011年 5月18日 プレシアさんの大アルカナを変更しました。

episode ?

時は少し遡る

「カールか、久しいな」

私がビルの上から一撃を放って家に帰る途中、久しぶりに感じたこの視線で盟友の存在に気が付いた。

『ええ、おひさしぶりですね死神殿。姿を見せれぬのは申し訳ありません』

「構わん、約束を忘れていたのだったら失望していたところだったよ」

『無論、忘れる訳などありますまい。しかし、此度の御業には些か驚かされましたな』

「卿が驚くとは珍しい、未知でも体験できたのか？」

『いいえ、残念ながら。あなたが“運命を貫く槍”の正当後継者だったことは素直に驚いたがやはりこれも既知だった』

「そうか、それは私の力量不足だったかな」

『あの槍を一割程度の力で放ってあの威力は流石の一言、いつの間にか手加減がうまくなってらっしゃる』

「それでもこの物語では普段から私の存在力を抑えているのでな。

だが、やはりというか。極端にしか抑えられん。ちまちまと一割ずつ力を上げることなどできんよ」

『ふふふ、やはりあなたは――』

「それで、一体なんの用だ？ 卿とならば世間話も一興だが、ただ世間話をしに来たわけでもあるまい」

『ええ、二つほどお話が有りましたゆえ』

「話せ」

『円卓の第九席の候補が見つかりました』

「ほう、では早速だが会いに行くか」

『御意に』

プレシア side

「アリシアが、生きている？」

「魂がそこに宿っておるのだ、死んではおらんよ」

それを聞いて私は涙を流した。

「で、でも、心臓が止まったし――」

「心臓が止まった」死んだ、と考えるのは間違いだ。で、どうする

かな？」

私はこの男、いいえお方に選択を迫られている。

「わかりました、その提案を飲みましょう」

「よかろう、ならば卿にルーンは束縛　大アルカナは死神　占星術
は天蠍宮　円卓の第八席を与える」

「ありがたき幸せ」

ここに私は新たな居場所を見つけた。

「では愛すべき部下の為に娘を目覚めさせよう」

「お待ちください、首領閣下」

「首領閣下はやめてくれ、柄ではない」

「御冗談を、あなたほどに似合っている方も珍しいですわ」

「それでもだ、絶対に団員以外の前ではやめてほしい」

「わかりましたわ」

ならばよし

「復活の件ですが少々お待ちくださらないかしら？」

「なにか問題でも？」

「はい、第二の娘と話を」

「ああ、そうだったな。良かろう、好きにしろ」

俺はそうしてこの場を後にするのであった。

「聖遺物は移植はかなりの難易度だったと言っていたな、カールよ」

「ええ、聖遺物はあなたのような方でなければ人を選ぶ。そしてあなた以上に聖遺物に選ばれる人物もおられるまい、すなわちは――」

」

「皆まで言っな、わかっているよカール」

「ふふふ、これは失敬。しかしやはりと言うか、やや圧倒しすぎなのでは？」

「プレシアはあれでも多くの修羅場を通ってきた戦士だ、聖遺物が使えなくても匹敵するほどの力と魂は持っている」

「確かに、あなたの抑えなしの威圧に耐えられずに塵となる程度の魂は円卓に要りませぬか」

「無論」

円卓の騎士、現在数三名

episode ? (後書き)

短すぎたって反省はしている。

今後増やすつもりですがやはり聖遺物は移植したほうがいいのかな？

あと、一人でも円卓のメンバーとかの候補とかあったら教えてく
ださい。

ちなみに自分の中で三名は決定していますwww

特に二名は絶対入れるね。

episode ? (前書き)

不覚ながらも昨日は更新できなかった。

反省している。

さて、そんなことよりも11話です。

次から無印編は終盤に移って行きますがその前に、すこしだけ。

この話は閑話できなものなのであまり見なくてもかまいません。

一応は物語に関係しています。

時系列がめちゃくちゃなので、気に入らない方は次のお話からどうぞ。

episode ?

なのはside

アースラでリンディさんと協力してジュエルシードを探すことを決定して、私はお家で待機命令を出されました。

だから――

「迅お兄ちゃん、一緒にお風呂入ろう!」

「そついうのは兄さんに言ってくれないか」

迅お兄ちゃんとお風呂に入るために必死に説得しています。

そつ言えば、話し方が戻ったんだね。

「お母さん、一緒に入ってくれない!」

「あらあら、迅一緒に入ってくれないかしら?」

「……わかった」

凄く渋々してるけども了解はとれたの!

「なら早く入ろう!」

迅お兄ちゃんの手を引っ張って私はお風呂に向かうの。

凄く、凄く嬉しいの！

ところで迅お兄ちゃんが言ってた兄さんって――

――ああ、そういえばもう一人お兄ちゃんがいたね。

知らぬ間に扱いが酷くなっていたりしている恭也だった。

side out

プレシア side

時は少し遡り、円卓の席を頂いた翌日。私は迅様から一つ力を授かった。

「擬似的聖遺物？」

「左様、本来聖遺物とは死者の魂を喰らい強化し、己の渴望によって成長する。しかしお前に宿したのは魂ではなく己の魔力を源としている」

つまりは私の魔力分だけ、この聖遺物は強化されているのね。

「一応は、非殺傷設定もできなくはない」

「それはありがたいですわね。殺傷設定しかできないんだったら管理局に目を付けられてしまうもの」

「だろう、気をつけてもらいたいののは、それは複製ゆえに己の身体をそこまであげられん。と言ってもお前はかなりの魔力を有してい

るのであまり心配はなさそうだがな」

「お言葉ですが、身体の強化とは？」

「知能以外の身体機能全ての上昇、対物、対魔、環境適応能力、毒物、全てに対する抵抗があがる。今のお前ならば鉄砲程度なら痛みすら感じないし効かない。全うな手段で倒そうとしても地球の戦車の砲撃を直で当たって、ようやく傷を少々追わせられる程度、しかもその上に、バリアまで張れる」

なによそれ、ほとんど最強じゃない。

「……この力を使用するに対する反動は？」

だがそれほどの力だ、私がもらったこの聖遺物には反動があるはず。

「ない」

だが迅様の口からは私の予想に対する否定の声が放たれた。

「それは火力や広範囲という意味では低いが、代わりに応用性が広い。プレシアにはうってつけの武器だと思ったが」

「いえ、性能の不満や活用性の話ではなく。使用するにあたりの反動は？」

「ない。聖遺物を宿すことで起きるデメリットは強いてあげるならば痛みに鈍くなり、死に対する恐怖がなくなってしまう。死に対する恐怖がなくなってしまう。それと聖遺物を破壊された場合はプレシアは己の魔力で動いているので戦闘はおろか一切の行動ができな

くなる」

それだけ、それだけなんて反則も良いところじゃないよ！

「病氣も治っているはずだ、これからは己の魂に恥じぬ生き方をしろ」

「はっ！　ありがとうございます！..」

ああ、この死神殿はなんと神々しい。

良いでしょう、私の全てをあなたの為に振ります。

プレシアの忠誠度は上がって行く。

side out

フエイトside

「あ、あの、お母さん」

「あら、帰ってきたのフエイト」

私は今、お母さんのところにジュエルシードを届けに来ています。

「これが今までの分です」

「そう、ご苦勞様」

そっけなく答える母さん。

あれ？　いつもとなにかが違う。

「なにか甘い匂いがしているんだけども、なにか食べてきたのかしら？」

わ、渡そう。

初めて作ってみたから味は自信がないけども

「これ、ケーキを作ってみたの」

テレビでやってたのを見て、お母さんにも食べてもらいたいと思って頑張った。

「へえ！　ならアルフも呼んできなさい、みんなで食べたほうが絶対に美味しいわ」

「え！？」

嘘、どうしちゃったんだろう？

いつもなら、『あなたが作ったものなんかいらないわ！』とか言うて捨てられるはずなのに。

「どうしたの、固まっちゃって。食べないのかしら？」

「う、ううん！　すぐに呼んでくるね！！」

なにがあっただろう？

フエイトの疑問は積もるばかりである

S
i
d
e

o
u
t

episode ? (後書き)

どうでしたか？

話の流れとかがめちゃくちゃですが怒らないでください。

次回はちゃんと作ります。

今回はプレシアさんについてのご質問がありましたのでこの場を借りてお答えします。

Q、円卓の九席はザミエルですがやはり聖遺物もそうなんですか？

これにつきましては違います。

基本、聖遺物は原作のものを使いたいとは思っていますが席番で判断されないでください。

円卓のことには物語の本編と同時進行で進めていきたいと思っています。

誰の聖遺物を誰に渡すかなども自分のイメージと皆様からの意見などを参考にさせていただいております。

ではこの辺で、皆様また次回お会いしましょう！

episode ? (前書き)

どうも、おはこんばんわ。

春休みの部活が今回の地震でなくなったのに、まさかの再開
体中が筋肉痛ですごく痛いっす。

そんなこんなで第十二話、始まります！

episode ?

なのはside

「フェイトちゃん!」

私がアースラのブリッジに着くとモニターにはフェイトちゃんが竜巻が吹き荒れている海の上で必死にジュエルシードへと向かっていた。

大変なの、はやくいかなきゃ!!

「あの! 私急いで現場に――」

「その必要はないよ」

だけどクロノ君に止められたの。

「放っておけばあの子は自滅する、仮に自滅しなかったとしても力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも!」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

なんて酷いことを

「私達は常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」

分かってる。

リンディさん達の選択は間違ってなんかいないの。

でもね――

「ユーノ君！」

「ああ、任せてなのは！」

私は、私の魂はそんなことを認めてないの！！

「ごめんなさい。高町なのは、命令を聞かず行きます！」

待っててね、フェイトちゃん！

Side out

三人称 side

なのはがアースラから飛び出すとほぼ同時刻

もう一つの異変が起きていた。

「ほづ、多いな」

フェイト達から離れている海上では百を超える人間が海鳴りの街へと進行していた。

「・・・このままいけば彼女らと出会ってしまつか」

ならばよろしい。

「お見せしよう、我が形成を」

両手を広げ己の形成の名を唱える

「形成——運命切り裂く死神の鎌」

両の腕に鎌が現れる

黒い表面には紅い数本の線が刻まれており、それが鎌の恐ろしさを強調していた。

「ジュエルシードとやらを求めるのは結構だが英雄の資格なき者らにはこの物語からの退場を願おう」

そう呟き迅は虚空へと飛び出す

そのままの勢いで海面に着地すると同時に“駆け出す”

決して低空飛行などではなく文字通り駆けているのだ。

原理は単純解明、片足が沈む前にもう片足を踏み出す。

それをただ単に行なっているだけ。

だがその行動だけで分かる

この男が既に人外であると

海面から飛び上がり迅は空中にいる人の群れへと斬りかかった。

この鎌はギロチン

ゆえにギロチンが斬ると欲する部分は一つ

両手を横に薙ぐと一気に十人の首が跳ねられた。

「このようなことは前座にすらならん、さつさと終わらせるとしよう」

死神はその鎌ギロチンを振るい続けるのであった。

S i d e o u t

なのはs i d e

私はアースラから転送されると空から自由落下していた。

仰向けの状態で落ちながら、段々と遠くなっていく青い空を眺め咳いた。

「いくよ、レイジングハート」

あの日、私が魔法に初めて関わった時の言葉を紡いでいく

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に」

日常から、非日常へと変わる切っ掛けとなった言葉

でも私は後悔なんかしていない。

「不屈の心はこの胸に！」

体を光が包み込んで、バリアジャケットへと姿を変える。

結界内へと入り込むとフェイトちゃんとアルフさんがいたの。

「フェイトの、邪魔をするなああああああ！」

アルフさんが私に突撃してくる。

だけど私達の間割り込むようにユーノ君が現れて、シールドを張って守ってくれたの。

「違う、僕達は君達と戦いにきたんじゃない！」

「ユーノ君！」

タイミングバッチシなの！

「『馬鹿な、なにやってんだ君達は！！』」

アースラからはクロノ君の声が届いた。

「私は、私の魂に従ったままでなの」

純粹に助けたいと思った。

そう強く思ったからこそ、私はここにきた。

「まずはジュエルシードを封印しないとマズイことになる」

ユーノ君はアルフさんから離れて竜巻の方へと向かう。

「だから今は、封印のサポートを！」

バインドを出して、竜巻の動きを封じる。

ふえええ！ ユーノ君、竜巻を捕まえるなんてすごいの！！

「フェイトちゃん！」

内心で驚きつつもフェイトちゃんの真横に降りる。

「手伝って、ジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートから私の魔力をバルディッシュに送ってパワーを回復させてあげるの。

「二人できっちり半分こ」

だから今は、一緒に頑張ろう？

竜巻のところではアルフさんもバインドを出して、ユーノ君のお手

伝いをしている。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる、だから今の内に二人でせーので一気に封印!!」

フェイトちゃんから離れて、レイジングハートを構え

「デイベインバスター、フルパワーいけるね？」

レイジングハートを竜巻の中心へと向ける。

「せーの!!」

合図をしてレイジングハートを振りかぶって

「サンダアアアアア」

「デイベイイイイイン」

「レイジイイイイイイイイイイ!!」

「バスタアアアアアアアア!!」

二人同時に放ったのだった。

s i d e o u t

封印現場 side

なのはとフェイトの間に青い光が柱となって現れた。

その光の柱の中にはジュエルシールドが5個あった。

そう、5個しかないのだ。

発見されているはずのジュエルシールドは6つ

ではあと一個はどこに？

現場に居た、全員が戸惑って居た時

「「っ！」「」

なのはとフェイトに左右から二匹の水の龍が現れて二人を飲み込もうとしてきた。

突然のことに二人は反応できずに固まっている。

二人だけではない。

アルフもユーノも、モニターで見ていたアースラの人間たちも全員動けずにいた。

誰もが食われる、そう思った

しかし

「やれやれ、やっぱり詰めが甘いわね」

誰か、女性の声がしたと思ったら二匹の龍を雷が貫いた。

「まったく、こうなる前に報告ぐらいにはきなさい。フェイト」

やってきたのは、かつて大魔導師と呼ばれた女性、プレシア・テスタロッサだった。

episode ? (後書き)

昨日更新した話と一部関連はありましたが、気にしなくても結構です。

円卓のメンバーの件についてのお話なんですが、現在皆様からの意見で特に多かったキャラたちが最有力です。

ちなみに誰とは言いませんが、プレシアさん以外の四名の候補が結構あがっています。

聖遺物（武器・形状）などに関しても意見をおまちしております。

ではこの辺で、また次回にでもお会いしましょう。

epilogue & prologue? (前書き)

なんとか一昨日の分は取り返した。

話が強引すぎたりしましたがこれは今度外伝的な感じで書きたいと思います。

4月6日、時間軸がズれていたので少々編集をしました

epilogue & prologue?

皆に聞いてほしいことがある。

俺が海上で百人を相手にして帰って寝ている間にジュエルシード事件が終了していた。

納得がいけないと言えはいけないが、プレシアが介入した時点で物語は終了していただろうことは明白だ。

「で、お前が言い訳をして誤魔化したと？」

「ええ、なんとか」

朝早くの公園で、プレシアと秘かに会ってことの顛末を聞いていた。

「アリシア復活のための魔力はジュエルシードから抽出して、プロジェクトFについてフェイト出生の話をしましたら艦長のリンディ・ハラオウンが本局へのごまかしまで入れてくださいましたわ」

「それは重畳、問題はなにか起きたか？」

「いいえ、強いて言うならば娘が二人になって忙しくなったぐらいですわ」

「そうか。さて、では俺は行くでしょう」

「はっ、私はこれからミッドチルダまで行きます」

「わかった、来る日に向けて力を蓄えておけ」

「御意に」

プレシアの足元に魔方陣が現れてどこかへと消えてしまった。

だがそんなことも気にせずに俺は歩く。

三人称 side

「いらつしゃい」

ここは八神邸、今日ははやての家に泊まりにきたのだ。

「どや？ 既知は壊せたんか？」

「残念ながら、そうそう簡単に壊せるのならばとつくにやっているよ」

はやてと食卓を囲みながら悔しそうに話す迅

「しかしここは落ち着く」

「なんでや、普通自分の家の方が落ち着かへん？」

「そうでもないのだ、存在の力を抑えるのは存外に難しくてな。少々疲れる、その点ここでは抑える必要がない」

「ははは、でもお客が来たら「断る」まあ、構わへんか」

諦めたような表情で頂垂れるはやて

だが内心ではここが迅にとって落ち着く場所だと言われて嬉しいのだ。

「これで既知を断てたら、もっと最高の気分になれるとちゃうん」

「その通り、約束の日が来るのを待っているのだよ」

はやてと迅は呑気に世間話をしながら食事をするのであった。

s i d e o u t

なのはs i d e

今日は迅お兄ちゃんが居ない。

もしかしたら明日も居ないかもしれない。

フェイトちゃんと友達になってここしばらくの間、幸せな気分だったのに一気に落ちた。

あの日、プレシアさんが野暮用とか言ってしばらく見つからなかったから焦ったけども――

そんなことよりも迅お兄ちゃんが居ないと寂しいの！！

お父さんもお母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃん達に対して放任主義と言っか、信用しきっているというか。

恭也お兄ちゃんは忍さんに会いにお泊りだ。

別にどうでも良いけど。

お母さんが迅お兄ちゃんから電話されてた時の会話を聞くにもしかしたら明日も居ないかもしれない……

「そんなの嫌なの〜！」

私は迅お兄ちゃんの布団にくるまりながらジタバタする。

最近、ユーノ君とかが常に近くにいたし。アースラでの待機も多かったから全然迅お兄ちゃんと会ってない。

「にゃあああ、残り香だけじゃ我慢できないよ〜」

早く、早く会いたいよ〜。

s i d e o u t

はやてs i d e

食事も終わって、うちの部屋で一緒にゲームをして、もうすぐ寝ようと考えていたが大事なことを忘れそうになっていた。

「うちら風呂にまだ入つとらへん！」

これは由々しき問題や、衛生的なことはしっかりせなあかん。

でも、一人で入るのも寂しいしな

「てなわけで迅、一緒に入ろう」

「どういう訳が分からんが……ふむ」

迅は私を横抱き、いわゆるお姫様抱っこをして歩き出す。

「よかるう、我が友の頼みならば聞こうではないか」

なんや？ 言っただけが恥ずかしくなってしまうた。

だけでも、それで迅と一緒に入れるんやったら構わへん。

「ここは……」

おお、迅が興味深気に見とる。

「ここは我が家が誇る、天然温泉浴場や!!」

目の前には緑生い茂る庭、上下左右正面はガラスで守られておって雨の日も風景を楽しみながら入れる。

しかも風呂の大きさも結構広くて、温泉なみにあるはずや。

行ったことがないからわからへんけども。

恥ずかしいけどもうちは迅と身体を隅々まで洗いつこし（別にエロイ意味やあらへんで!）、夜景を楽しみながら風呂に浸かった。

「今日は星が綺麗やな」

「ああ、そうだな」

身体を伸ばし、リラックスをしながら夜空を眺める迅に背中を預けるようにしながらうちは一緒に夜空を見上げる。

なんや、こうしているとカップルみたいや。

ふふふ、せやな。

今は親友やけど男として迅を狙ってみるのもええかもな。

この時、私達はまだ知らなかった。

寝室で一冊の魔導書が起動し、守護騎士達が主不在で大慌てしていることを。

新たな物語は既に始まっていた。

epilogue & prologue? (後書き)

A、S編に突入です。

メインヒロインを実は決めていなかったりする自分

sts編からでも間に合うからまだまだ余裕なんですけどね!!

episode ?? (前書き)

どうも昨日振ります。

いつも通りggggですが最後までお付き合いください。

episode ??

はやての体を拭いてあげ、着替えさせて抱き上げる。

「いい湯だったな」

「そ、そうやな／＼」

どうしたのだろうか、はやての顔が赤い。

「しかし、泊まりに来るというのもなかなか楽しいものだ」

「ほんまか!？」

「ああ、友と一緒にいるというのは既知であれ楽しいものなのだ」

そうかそうかと嬉しそうに笑うはやて。

そんなはやてを見て和みつつベットへと寝かして俺も隣にお邪魔をする。

「あ、もう十二時や」

「思っていた以上に夜更かしをしてしまったが、そろそろ寝るか」

「駄目や、まだうちの愛の営みがまだや。夜はなが「寝ようか」
なんや、この無視された時のゾクゾクする感じは？」

新たな自分との邂逅を果たそうとしているはやてを撫でて宥めてみる。

嬉しそうに笑いながら俺に抱きついてきて、しょうがないと思っているとはやての後ろ。

怪しげな本が浮かび上がっていた。

「ところで、あれはなんだね？」

「本が浮かんどる！？」

どうやら知らないようだ、破壊してみるか？

そう思っていると本が自分を縛っている鉄の鎖を破壊して開いた。

魔方陣が現れて部屋は光に包まれる。

もしものことを考え、何の力も無いはやてを俺の後ろに持ってきて庇う。

光が収まるとベットの下で片膝をついて、まるで王に仕える臣下のような態勢でいる四人に気が付いた。

「……友人かね？」

「へ？　　おわ、誰やあんたら！！」

突如現れた四人組、だが心なしか顔が青い。

ああ、なるほど。そう言えば力を抑えてなかったな。

俺は四人が喋れる程度まで力を抑える。

「だ、誰や、あんたたち」

「我らヴォルケンリッター、闇の書の守護プログラムです！」

代表して、一番前にいるピンクの髪の子が答えた。

どうやら敵意はなさそうだし、はやての身になにかあればこやつらを殺せばよいか。

「はやて、俺は紅茶でも持って来よう。俺が居ると話しくそうだしな」

事情はあとで聞けば良い。

そそくさと部屋を出て紅茶を取りに行く。

今度こそ、既知を脱出できることを願っているよ。

はやて side

昨日の夜、現れた四人は闇の書って言う本の守護プログラムらしいんや。

リーダーのピンクの髪の子がシグナム

ハンマーを持った赤い髪の子がヴィータ

優しそうな金髪の子がシャル

犬にもなれる青っぱい白髪の子がザフィーラ

この四人が闇の書の守護プログラム、ヴォルケンリッター

魔法とか意味がわからへんけど、そうらしいんや。

んで、その四人なんやけど今こっつ面白いことになってるんや。

家の腕の中で震えあがるヴィータを撫でながらその光景を見ている。

「迅、抑えてくれへんか？」

「断る、昨日も言ったがここで抑えることは断じてしない」

困ったもんや、迅は有言実行やからな。

「なあなあ、お願いや。そんな距離でシグナムとお茶だなんて、下手したらシグナムが再起不能になるで？」

「構わん、こやつがどんな存在であれ仮にも我が友を守護すると言ったのだ。“英雄”の魂を持っていなければはやてとは釣り合わないよ」

なんかうち、迅に凄い高い評価を頂たいとる。

「でもなあ、机一枚挟んだだけで初対面の人間が迅とお茶を飲めると思うか？」

「無論、お前こそ俺に会ったその日にセクハラをしようとしたではないか。それこそ出来ると思うか？」

「出来るやろ、シグナムにだって会って一時間もしないうちに胸を揉んだやろ」

「そうだったな、俺の目の前で唐突に揉みだしたな」

「な、頼む。あまりにも四人が可愛そうなんや」

うちの腕で震えているのはヴィータ

シグナムは迅と机を一枚挟んで面と向かってもうてるし

そのシグナムの後ろではザフィーラが犬の状態で震えとって

うちの後ろにはさりげなくシャルが隠れている。

そんな迅に怯えなくてもええんとちゃう？

最初はうちもビビったから気持ちはわかるけど、悪い奴ではないんやで。

「仕方がない、友がそこまで頼むのなら癪だが抑えさせてもらおう」
力を急に抑えたせいか、四人が一斉に息を吐いた。

「ほら見てみい！ 四人ともこんなに我慢してたんやで！！」

「それは魂が弱いからだうに」

「迅のそれに耐えられるのなんてそうそうおらんわ！」

まったく、迅は駄目やな。

「大丈夫かみんな？」

うちはみんなを見渡しながら聞く

「な、なんとか」

「少々、時間をいただきたい」

「怖かったよはやてちゃん！」

「私も怖かったよー！」

上から順にシグナム、ザフィーラ、シャマル、ヴィータ

全員冷や汗たらしめて涙目や。

で、こんな状況を作った本人は優雅に紅茶などを飲んでおる。

はあ、混沌や

side out

なのはside

「迅お兄ちゃん」

なんとなく呼んでみた。

この家に今はいない兄のことを考えている。

今日は学校がお休みで、朝からずっと迅お兄ちゃんの部屋にいる。

枕に顔をうずくめて匂いを嗅ぐと落ち着く。

はあ、どこにいるんだろう？

なんか友達の家とか言ってたけど友達っていたんだ。

それが本当なら、その友達って凄い人なの。

そう言えば、ここ最近のお兄ちゃんのこと知らないな。

私の“迅お兄ちゃん観察日記”も毎日書いてるとはいえ家でのことばっかだし。

写真もお金がなくてメモリーカード買えないし、盗聴器とかあればその友達のこととかもわかるかもしれないの。

今度、買ってこようかな？

「ああ、お兄ちゃん帰ってきてほしいのー!!」

ボタンボタンと迅お兄ちゃんのベットで跳ねる。

「ただいま」

あ、この声に、この感覚

「迅お兄ちゃん!!」

急いで部屋を飛び出して、階段を駆け下りて、玄関にまだいた迅お兄ちゃんのお腹にダイブした。

「昨日振りか、なのは」

「うん！ お帰りなさい!!」

ふにゃあああ、やっぱり生は全然違うよ。

ああ、このお兄ちゃんのお………い？

あれ！？ お兄ちゃんから女の人の匂いがする!!

「母さん達は？」

「ふえ！？ えっと、お兄ちゃんは忍びさんの家に行ってて、お姉ちゃんは友達と遊びに、お父さんとお母さんは翠屋にいるの」

「そうか、ならばこのお土産は皆が帰ってから食べるとしよう」

私は迅お兄ちゃんに抱きついたまま一緒に移動する。

この匂い、嗅いだことがないの。

誰だ？

不愉快だ。

「迅お兄ちゃん、一緒にお風呂入ろう！！」

「まだ昼なのだが」

「良いの！ 沸かしてくるね！！」

他の女の匂いなんて迅お兄ちゃんからしてほしくない。

だから私が洗い落とそう、迅お兄ちゃんからして良いのは迅お兄ちゃんの匂いだけなんだから。

s i d e o u t

episode ?? (後書き)

おいおい、どうしようか？

ありがたいことに感想が二十件を突破いたしました！！

皆様、本当にありがとうございます。

些細なことでも良い、お気に入り登録しましただけでも良い

それが原動力となってこうして書き続けられるのです。

あと、今朝の話なんですが。

他の作者様の文などを参考にさせていただくために“魔法少女リリカルなのは”のタグをクリックしました。

PCからなのですが最初は週刊ユニーク数が多い順で表示されるのです。

そうしたら、一ページ目の一番下にこの作品が！！

思わず驚愕してしまいました。

いやあ、嬉しいですな。

でももっと上のほうにある方達って……凄いですよね。

トップ3ぐらいになると余裕で1万超えたりしてて、文を書いてい

る身としてはどんな秘訣を使っているかわかりません。

純粹に面白さの差だとは分かっているんですけどもね!!

……頑張ろう。

皆様からのご意見、ご感想お待ちしております!!

episode ?? (前書き)

更新しましたwww

episode ??

俺は学校には行っていない。

だからと言って、頭が悪い訳ではない。

むしろ、大学レベルの問題ですら解けると自負している。

そんな俺は日中、仕事がある。

高町家は数年前、俺を拾ってくれた大恩のある家だ。

それまでは公園でカールとの念話などで時間を潰していたが、ここに来てからはそれなりに有意義な生活を送っている。

八神はやてという“英雄”としても“友”としても認められる魂の持ち主にも出会えた。

聞けば、一人で数年も暮らしており足も悪い。

聖遺物を譲渡すれば多少は改善されると思うがどうしてか、気分が乗らなかった。

なので俺は家に遊びに行き、出来る限りの時間を尽くした。

それに一昨日は誕生日だったので、プレゼントまで作った。

ふむ、カールによく女に甘いと言っていたが俺も人のことは言えま

いな。

些か、話がずれた。

俺の仕事とは厨房にいることだ。

料理が出来ない訳ではないが、基本的には作らない。

俺の聖遺物、数十万の魂を吸ったせいか使用者の俺までもが圧倒的な存在感を出してしまっている。

抑えることができるのが幸いだろっ。

そして、父さんと母さん。

高町士郎と高町桃子は俺のそこに着眼した。

厨房で人に害をなさないほどの存在感をだす。

難しかったが、やってみせた。

表には出ずに、厨房でのんびりと読書をする。

存在感のおかげで、店の存在感があると勘違いして入ってくお客を狙っているのだ。

効果のほどは重畳、味は美味しかったために評判も良い。

話を聞けば売り上げが三割増し

この程度で恩が少しでも返せるのならばいくらでも協力しよう。

はやての家にはヴォルケンリッターもいるので心配は少ない。

今日は読書ではなくのはと話している。

はやての家に泊まりに行って会えなかったのが寂しかったのか昨日からベツタリだ。

兄離れはいつになることやら。

シグナム side

「主はやて、聞きたいことがあるのですが」

「なんや？」

私は闇の書の守護管理プログラム、烈火の将シグナム

ヴォルケンリッターのリーダーでもある。

「昨日のあの人物は誰ですか？」

昨日の、あの対面するだけで魂が塵となりそうなほどになった人物
恐ろしい話だが、主との会話を聞くに敵意を見せてない自然な状態
であの威圧感だったのだ。

「あれはうちの親友、高町迅って人や」

高町迅、さぞ名のある御方なのだろう。

「別に迅はみんなに敵意があるわけでもないで、だからそないなビビる必要はあらへん」

無茶を言わないでいただきたい。

この主に不満があるとすればこれもその一つだ。

だがそれは無茶であるが嫌な嫌悪感を抱くものではない。

我らを物ではなく家族のように扱ってくれる。

シャルとヴィータは一日で懐いてしまった。

悪いことではない。

今までの主はほとんどが私達を道具扱いだったのだ。

今回の主ほど優しい方は二人目だ。

「まあ、無茶つてのは少しだけわかるで」

少しとは…でも主はやては確かに平然としてらっしゃったし。

「あの威圧に耐えるのには条件があるんや」

「条件…ですか？」

「せや、言うのは簡単やけどやるのは難しいで」

なんなのだそれは一体？

「魂を強くせなアカン」

「魂をですか？」

「そうや、精神力が強いんやなくて魂や。それこそ迅が英雄と認められるほどの魂を持っておらんかったら耐えられへん」

「では主はやては彼に英雄と認められたのですか」

「さあ？ それはわからんけども友としては認められてると思うで」

それは英雄と認められるより難しいのでは？

そう思わずにはいらなかった。

S i d e o u t

episode ?? (後書き)

話の続きがかんがえられないorz

episode ?? (前書き)

どうも、十五話目です。

前回からかなりの月日が開いてることになっていますがお嫌いにならないかつたら見て行ってください。

episode ??

とある日の夜、俺のところに急な念話が入った。

「『迅様、少々よろしいでしょうか？』」

「『この声は……プレシアか、久しいな』」

懐かしい声、半年振りになるな

「『はっ、ただいまアースラにて地球の衛星軌道上へと着きました』」

「『わかった、報告ご苦労』」

衛星軌道上、つまりは宇宙に居るのか。

「『ありがたきお言葉です……ところで一つお聞きしたいことが』」

「『なんだ？』」

「『はっ、私が頂いた聖遺物のことに関してなのですが——』」

「『……なのですか？』」

「『ほう、良く半年で気が付いたな』」

珍しく、嘘をついたのだが——やはり慣れないことはするものではないな。

「『これでも研究者の端くれなので……では、先程の質問の答えは』」

「『yesだ』」

「『やはり——では私も集めた方が？』」

「『いや、良い。それをやると目を付けられてしまう可能性があるのでは。まだ、時期がはい』」

「『御意に』」

そこでプレシアの気配が消える。

一方で、家の近くでは戦闘の気配がしている。

ヴィータとなのはか？

結界も発動しているようだし……ふむ

俺は目を瞑り、意識を集中させる。

すると、戦闘現場の様子が見えてきた。

カールに遠見の魔法とやらを教えてもらっておいで正解だったな。

戦闘現場 side

「くっ！？」

なのはとヴィータは突然起こった異変に戦闘中だが硬直してしまった。

誰かに見られているような、そんな感じた。

気味が悪い、その気持ち両者の胸を支配していた。

「この野郎おおおおおおお！！！」

得体のしれない恐怖にヴィータはやく蒐集をして帰ろうとなのはを吹き飛ばしに掛かるが

「話を聞いてつてば！！！」

「『ダイバインバスター』」

「くっ！」

なのはのダイバインバスターがヴィータの横スレスレを通過する。

その時の風圧のせいでヴィータの帽子は飛ばされてしまった。

地面へと落ちていく帽子を見て、ヴィータの瞳孔が開き、心は怒りで一杯だった。

「グラーファイゼン、カートリッジロード！」

「えっ！？」

グラフアイゼンから火が噴き出て、ヴィータの速度を速める。

「ラケーテン」

なのはは次第に追いつかれてしまい、魔方陣で防御するもいとも簡単に破られてしまった。

それだけではない、相棒であるレイジングハートも攻撃を受けてしまいヒビが入る。

「ハンマアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「きやあああああああああああああ！！！」

なのはは吹き飛ばされてしまい、ビルに叩きつけられる。

「てえええええええええい！」更に追い打ちを掛けに行くヴィータ

「『プロテクション』」

レイジングハートはボロボロになりながらも己の主を守ろうとバリアを張る

「ぶち抜けええええええええええ！！！」

「『了解』」

しかしながらそんなレイジングハートの頑張りも虚しく、数瞬の拮抗の後に破られてしまいなのはのバリアジャケットの一部ごと吹き

飛ばしてしまった。

「ハアハアハアハア」

やっと終わった、はやく蒐集してこの場から去ろう

段々と冷静になり始めてきたヴィータは蒐集をするためになのはへと近づいていく

それに対してなのははボロボロの体で、同じくボロボロになっているレイシングハートを向ける。

それを戦意と認めてかはわからないがヴィータはゆっくりとグラーフアイゼンを振り上げる。

s i d e o u t

なのはs i d e

いつそ時が止まればと思う。

この日常が、家族や友と過ごしている日常を

変わらない日常を求めるため。

遠くにいつてしまった友達や仲間と一緒に過ごせることを楽しみにしていた自分

そのまま時が止まってしまえばいい。

ただ現実残酷で、目の前では私を殺そうとしている女の子が居た。

「（こんなので、終わり？）」

知らない。

そもそも私は、こんなところで、まだ死ぬはずじゃないから――

そして振り下ろされるハンマー

私を倒さんと、明確な敵意を持って振り下ろされる一撃に私は瞬きすることすらできずに呆然とそれを見つめた。

そして、私の物語に奇跡（お約束）は起こった。

鈍い金属音が響き渡る。

私と赤い髪の女の子の間に割って入ってきたのは私の良く知っている金髪の女の子

「ごめんなのは、遅くなった」

肩に手を添えられる。

そこにも私の良く知っている子が居た。

「ユーノ、君？」

あれ、でも時空管理局の本局にいるんじゃないの？

「仲間か？」

罅迫り合いになりながら赤い髪の子は問う。

一旦距離を置いて、金髪の子がデバイスを相手に向けて言った。

「友達だ」

助けに来てくれたの子の名前はフェイト・テストロッサ

半年ぶりに出会った、私の友達だった。

s i d e o u t

e p i s o d e ? ? (後書き)

感想お待ちしております

e p i s o d e ? ? (前書き)

なんとかこの日の投稿は間に合ったな。

でも急いでせいで、 g d g d な内容だし見直しもしてない(汗)

episode ??

それは、小さな願いでした。

望んだのは静かな日々

待っていたのは、遠く離れた友達との再開

だけど、訪れたのは突然の襲撃者

出会い、戦い、大きな力

運命が、今、静かに動き始めて

嵐の中でも心を繋げた絆を信じて

魔法少女リリカルなのはA・S 疾走する聖遺物 始まります

戦闘現場side

なのはが吹き飛ばされたビルの中でヴィータとフェイトは互いに武器を構えたまま向き合っていた。

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪ではすまない罪だ」

「なんだテメエ、管理局の魔導師か？」

だったのならば、ヴィータはマズイことになると考えた。

今更だが、闇の書は一級指定のロストログア

今までの主ならともかくとして、今回の主——はや
ては優しい

自分たちを道具ではなく家族として扱ってくれる。

もちろん、自分たちははやてが大好きである。

そんな人を管理局なんかに奪われたくはない。

それに、もしも闇の書を奪われてしまえばはやての脚は一生治らな
いかもしれない。

もしかしたらだが、あの死神がなんとかするかもしれないが——

とにかくだ。

こいつが管理局だったら逃げるしかあるまい。

一瞬のうちにこれだけのことを考えるヴィータ

「時空管理局、囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

フェイトの名乗りで自分の予想が合っていたことを確かめると急い
でヴィータは逃げる算段を考え出す。

「抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解

除して！」

「誰がするかよ！」

ヴィータは後ろへと跳び、ビルの外へと出ると急上昇をする。

「ユーノ、なのはを任せた」

それをすぐさまフェイトは追った。

s i d e o u t

ヴィータ s i d e

二人は上昇するとまたも互いに睨みあって止まった。

「（ちっ、このまま帰ったらわざわざ相手に居場所を教えることになっちまうか）」

幸いなことに、もう一人の魔導師からは引き離れたもののこの魔導師もさっきの白い魔導師と同じぐらいの魔力を持つてるっぽい目の前の黒衣の魔導師

しかもこいつの方が実戦経験豊富そうだ。

厄介だ、蒐集をできなかったとしてもなんとか前線から引かせるぐらいのことはしなければ管理局にはやてが見つかっちゃう。

「バルディッシュ」

「Arc Saber」

黒い魔導師が金色の魔法刃を放ってくる。

「グラーファイゼン！」

「Swallow Flier」

私はそれに対して四つ

ビー玉サイズの鉄球をアイゼンで打った。

「障壁！」

鉄球は魔法刃を狙ったわけではなく、その横を通り過ぎるように通って直接魔導師へと攻撃するために向かう。

魔法刃を障壁で守りながら追尾させる。

「バリアアアアア」

コントロールに必死だったせいで、下から迫ってくるやつに気づくのが遅れちゃった。

「ブレイクウウウー！！」

なんとか防いだが、かなりきつい。

それに黒い魔導師の方を追っていた鉄球も自滅しちまったし

障壁にヒビが入る。

なんとか意地で相殺させて、相手が怯んだところをアイゼンで殴りにかかる。

相手は障壁を張るも、それごと私は叩きつけてやった。

その瞬間、横からくる一撃に気づいた私は急いで上昇をする。

間一発でその一太刀を避けるも更なる追撃で一撃を貰ってしまいそうになるがアイゼンでなんとか受け止めた。

「（ぶつつぶすだけなら簡単なんだけど、それじゃあ意味がねえんだ）」

もどかしさを感じつつも私は目の前のことに集中する。

「（魔力を持って帰らないと――カートリッジ残り二発、やれっか?）」

side out

「ヴィータ、捕えられたか」

空中で手足を魔法で固定されてしまったヴィータ

「終わりだね」

フェイトがバルディッシュの先を向ける。

「名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ」

管理局……法を守る警察のような組織だったか？

その役、なかなか板に付いていると思うぞフェイトよ。

だが、甘い。

プレシアにも言われてたであろう、詰め甘いと。

「く、くう——！」

ヴィータが唸りを上げる。

「なんかやばいよ、フェイト——！」

それになにか気づいたのかアルフが焦りが混じった声でフェイトへと話しかける。

途端、急にフェイトの前に謎の人物が現れる。

「ほう、シグナムか」

いきなり現れたシグナムはフェイトへと切りかかる。

突然のことに反応できなかったフェイトは当然、弾き飛ばされた。

「シグナム？」

ヴィータが不思議そうな顔をする

「うおおおおおー！」

怒声と共に現れたのはザフィーラ

アルフに右のハイキックを喰らわせる。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

「explosion！」

シグナムの剣から炎が噴き出してくる。

「紫電一閃！」

上から叩きつけるような一撃で、フェイトのバルディッシュを断ち
さらにもう一閃、バルディッシュがなんとかプロテクションを張っ
て防ぐもフェイトをはるか上空から地面へと叩きつけられる。

「フェイト！」

それを見たアルフは声を荒げて、フェイトの下へと行こうとするが
ザフィーラがフェイトへの道の間に入ってそれを阻止する。

「こんのっ！」

歯を食いしばるアルフ、ザフィーラは拳を握って迎撃の態勢をとる。

「フェイトちゃん……アルフさん……」

一方で、少し離れた場所で観戦していたなのはそんな二人を見て心配そうにしていた。

「まずい、助けなきゃ」

ユーノはブツブツとなにかを呟きだし、なのはを中心として魔方阵を展開する。

「回復と、防御の結界魔法。なのはは絶対にここから出ないでね」

そう言い残してユーノは二人の助けに向かう。

ユーノ、まだまだだな。

それではこの戦場での貴様の役目を果たせないではないか。

俺は静かに全員の観察を行うのであった。

シグナム side

「どうしたヴィータ、油断でもしたか？」

「うるせえよ！　ここから逆転するところだったんだ！」

「そうか……それは邪魔したな、すまなかった」

ヴィータを助けに来たのだが、はやく帰りたい。

この戦場に来てから、ずっと感じるこの視線

意味が悪い。

私はヴィータに掛けられているバインドを解く。

こんな視線を気にするよりも目の前の良質なリンカーコアを蒐集することに専念せねば。

その時、私は……いや、私達はまだ気が付いていなかった。

この視線の意味に。

s i d e o u t

episode ?? (後書き)

直すのはまた明日にしよう、そうしよう!!

円卓メンバーのアンケート待っております。

episode ?? (前書き)

PCで書いている時のESCボタン

携帯で書いているときの『切る』ボタン

ああ、こいつらのせいで俺はこの話を短くしただけではない。

何度、様々な作品で怒りを爆発させられたことか………

episode ??

シグナムside

「だがあんまり、無茶はするな」

私はヴィータのバインドを解き、そう言った。

「お前が怪我をしたら、我らが主が心配をする」

あの主は優しすぎる、もしも我々が怪我でもして帰ったならばすぐに蒐集のことがばれてしまい怒られるだろう。

そんなのは望んではない。

「わかってるよ、ったく、もう！」

拗ねたように頬を膨らませて顔を逸らすヴィータ

そんなヴィータに私は思わず可笑しそうに微笑んでしまう。

「それから、落し物だ。破損は直しておいたぞ」

先程の砲撃で落ちてしまったヴィータの帽子を私はかぶせてやり、頭をポンポンと叩く。

「……ありがとう、シグナム」

恥ずかしがりながらも、ヴィータは礼を言ってくる。

やはり主はやてと一緒に暮らし始めてから変わったなヴィータ
前までならばこんな風に礼など言わなかっただろうに。

下に視線を向けると、ザフィーラが高速で相手の使い魔と闘っている。

「状況は実質3対3、1対1なら我らベルカの騎士に――

「負けはねえ!!」

同時にお互いの相手へと飛び出す私とヴィータ

見せてやろう、ベルカの騎士の力を!!

「あれ？ 闇の書がない!？」

……見せてやろう、ベルカの騎士の力を!!

軽く、現実逃避する私であった。

side out

フェイトside

「大丈夫?」

「――うん、ありがとう、ユーノ」

ビルに叩きつけられた私は五階分ほど下に床を貫通して叩きつけられた。

下手したら死んでたかもしれないな。

ユーノに起こされながらも私は自分の状態を確認していく。

少しダメージはあるけど、戦闘不能なレベルじゃない。

「バルディッシュが……」

ユーノの視線を追ってみると、ボロボロになり、尚且つ二つに両断されているバルディッシュがあった。

その片方を手に取って、見てみる。

「大丈夫、本体は無事」

本体が無事なら私はまだ戦える。

「recovery」

バルディッシュは自己修復機能を使って、なんとかもとに戻る。

これで、大丈夫

「ユーノ、この結界内から全員同時に外へ転送、いける?」

穴が開いた天井から空を見上げ、私はユーノに聞いた。

「うん、アルフと協力できれば……なんとか」

でもアルフは今、戦闘中だ

「私が前に出るから、その間にやってみてくれる？」

「わかった」

友達を助けにきたんだ、やってみせる。

「『アルフも良い？』」

「『ちよいとキツイけど、なんとかするよ！』」

アルフも念話でこの話を聞いてくれていたらしい、話が早くて助かる。

「それじゃあ——頑張ろう！」

「うん！」

私達は同時に空へと飛翔する。

飛行していると下のビルにユーノの魔方陣の中からこちらを心配そうに見上げるのが見えた。

待っててね、なのは

side out

なのはside

戦場で行われている三つの戦い

それらを傍観しているのは心の底から悔やんでいた。

「自分にもっと力があれば……」

そうすればフェイトちゃん達に迷惑を掛けずに済んだかもしれないのに。

「助けなきゃ」

ならばせめて、自分が巻き込んでしまったみんなのことを助けなれば

「私が、みんなを——助けなきゃ!!」

「master」

私のその言葉に応えるようにレイジングハートが喋りだし、姿をエクスセリオンモードへと変える。

「レイジングハート……?」

「Let's shoot it. Starlight Breaker」

「そんな、無理だよ。そんな状態じゃ——」

「I can be it」

「あんな負担の掛かる魔法、レイジングハートが壊れちゃうよ！」

それでも撃てと、自分の限界を知りつつもレイジングハートは私に
そう言ったのだ。

「I believe, master」

私はあなたを信じる

「Trust me, my master」

だから自分を信じろてほしい

ぐつと零れ落ちそうな涙を堪えて私は覚悟を決めた。

「レイジングハートが私を信じるのならば、私もあなたを信じるよ」
レイジングハートを構えると、ユーノ君が張った魔方陣は消えて、
代わりに私の魔方陣が矛先へと現れる。

「『フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん。私が結界を壊すから、
タイミングを合わせて転送を！』」

「『なのは……』」

「『なのは、大丈夫なのかい？』」

「『……』」

「『大丈夫、スターライトブレイカーで撃ち貫くから!!』」

息を吸って、痛む体に力を入れる

「レイジングハート、カウントを！」

「All right」

予先に私の魔力が高エネルギーと化して集まって行く。

count ? ' ? ' ? ' ? '

カウントが進むごとに、**優先に収束するエネルギーは密度と大きさを増す。**

なにをしようか気が付いた、敵が私の攻撃を阻止しようとするけどもフェイトちゃん達に止められてるの。

[?
' ?
' ?
' ?
...]

「レイジングハート、大丈夫？」

[No problem]

頑張って、レイジングハート

count ? ' ? '

レイジングハートを振り上げて、放とうとした瞬間

「あっ!?!」

ズブリと、私のお腹から手が出ていた。

なにが起こったの？

立っているのが辛いの

意識を保つことが難しいの

魔力が吸われていって力も出ない

「count 0」

「ス、スターライト……………」

でも、慌てる前に、意識を失う前に、辛さで倒れる前に、この魔力がなくなる前に――

「スタアアアアライトオオオブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

文字通り、渾身の力でスターライトブレイカーを放って結界を破壊したの。

side out

episode ?? (後書き)

もういい、寝ます！

はぢいけぶ、今日は寝るー！ー！

episode ?? (前書き)

一日数話投稿だったのについつい、忘れてしまった。

学校が忙しくなったりしてるからだけど、それを言い訳にするつもりはない、

どうも申し訳ありませんでした。

episode ??

それは小さな願いでした。

微笑みを交わし合うこと、そつと触れ合うこと

だけど、私達を迎えたのは戦いの時

奪われてしまった力

傷ついてしまった魔導の杖達

まだハッキリ掴めない、戦うべき相手と、自分たちに出来ること。

だけど、それでも私達は――

魔法少女リリカルなのは a・s 編 〽疾走する聖遺物〽 始まります

アースラ side

「救護班急げ！」

「魔力数低下、至急魔力供給をおこなってください！！」

なのはが撃墜され、アースラでは医療班が駆けまわっていた。

その喧騒から離れた、艦長室では一人の少女が頭を抱えていた。

「私の、私のせいで、なのはが……」

「いいえ、あなたのせいじゃないわよフェイトちゃん。これは対応が遅れた私達の責任です」

フェイトは自分が力不足だったがためになのはがやられたと思っている。

「もっと、もっと私に力があれば」

フェイトのその小さな呟きは誰も、本人以外に聞こえることはなかった。

side out

ヴィータside

時は少し遡り

私達がいつもの場所に集まり、はやてのところに帰ろうとしたら

「「「「っっ!!」「」「」

カハッ、い、息が……

それどころか立ってすら居られない。

この感覚は何度も味わったことがある。

戦う、作戦、努力、才能、勝利

およそ、戦いに関するすべての感情を奪われるような感じ

あの、あの男が近くにいます。

まさか、だってシャルルの話ではやての家にいるって――

「まずはご苦労と、労っておこうか」

恐い、目の前に現れたコイツが恐い

嫌な奴だとか、危ない奴だとは思ってないが、これはそういう次元じゃないんだ。

本能？ 理性？

訳が解らない。

でも、絶対にこの男には逆らっちゃ駄目なんだ。

「ああ、シャルル。なんでここに俺がいるか分からないという顔をしているな。なに、簡単なことだ。はやてがあまりにも帰りが遅いから俺が連れ帰りにきたのだが……随分と面白いものが見れた」

私の横で跪いているシャルルに上から声を掛ける男。

「お前が貫いた相手、実は俺の義理の妹なのだ」

マズイ！

跪き、頭を垂れていても辛い

しかも今回の私ではなくシャルルに向けられた言葉だ。

言葉を向けられているシャルルは一体どのような心境なのか……考えたくもない。

「安心したまえ、あれは大威力の魔法を放つ時に周囲の警戒を怠り油断したゆえのミスであった。シャルルを責めるつもりはない。言ったであろう？　俺ははやてに頼まれて皆を回収しに来たのだ」

そこで、ようやく威圧を解いてくれた男

名前は高町 迅

正真正銘の“化け物”だ

「では、帰ろうか。はやての料理が冷めてしまう」

そういつて踵を返す迅

はあ、なんではやてはこいつと友達でいられるんだろうな？

side out

俺ははやてが寝たのを確認すると部屋を出て、ベランダへと出る。

空を見上げるとそこには幻想的なほどにまで美しい星空が広がっていた。

「そこのお前もどうだね、今日は星が綺麗だぞ」

「……気配を消した我々に気が付くとは、流石と言っておきましよう」

現れたのはシグナムだった。

「どうやら、真剣な様子だが？」

「はい、真面目な話です」

向けられる威圧だが一切の殺気が含まれてはいない。

「単刀直入に問いますが、貴方はどちらの味方ですか？」

「どちらとは？」

「我らが主か、それとも妹君の方ですか？」

なるほどな、そういうことか

「どちらでもないが、はやての邪魔をするつもりはない。仮になのは味方であるならばあの場で全員を殺していたよ」

「どちらでもない？」

怪訝に俺を見ってくる。

「ああ、そう言えばお前達にはまだ言っていなかったか」

それに対して俺は優雅に一礼をする。

「ようこそ海鳴の街へ、夜天の守護者達よ。この街でなにをするも君たちの自由だ、己の望みを叶えるために精々、頑張ってくれたまえ。海鳴の街は君達を歓迎しよう」

この優しい世界での新たなお伽噺の始まりを告げさせるためにも、挫けずに前に進んでいきたまえ。

「夜天の守護者？ 我々は闇の守護騎士だが」

「ははは、それは己で真実を見つけたまえ」

でなければ意味がないのだよ。

シグナム side

不覚にも私は見惚れてしまった。

迅は屋根の上に居るので私は見上げることになる。

優雅に一礼をする迅は残酷なまでに幻想的であった。

背後に見える星空がまるでこの時の為に存在していたかのように煌めく

ああ、なんと美しいのだろう。

この死神は私の心を刈り取っていく。

私は徐々にだがこの死神に惹かれ始めていくのであった。

S
i
d
e

o
u
t

episode ?? (後書き)

ヒロインどうすっかな？

他の作品も言えることだけどヒロイン決めが一番難しいような気がするぜ。

とにかく、感想とかお待ちしております

episode ?? (前書き)

祝 100000万アクセス突破！

皆様、本当にありがとうございました。

今回は戦闘はなしです。

次回は本編を進めるかどうかと悩んでおります。

episode ??

それは、小さな思いでした。

新たに始まる、私達の日々

決めたのは戦うことを諦めないこと。

誓ったのは、昨日よりもっと強くなること。

動き始めた運命に立ち向かうために。

もう二度と、大切な人を傷つけないために。

魔法少女リリカルなのは『疾走する聖遺物』 a・s 編 始まります。

三人称 side

AM 6:30 八神家 はやての部屋

朝早くに鳴り響く目覚まし、布団からモゾモゾと伸ばした腕でその音を止める。

「ん、んう」

はやては上半身を起こして、まだ眠い目を擦る。

その隣ではヴィータがこの前に買ってあげたうさぎの人形を大切にうに抱きながらまだ寝ていた。

それを見て和みつつ、そつと起こさないようにベットから降りて部屋を出る。

朝食を作るためにリビングに着くとシグナムがソファに座ったまま寝っていた。

その足元ではザフィーラも寝ている。

「ふふ、じゃあ朝ごはんを作るか」

A M 6 : 4 1 海鳴市市街地 ビル屋上

ここではフェイトがバルディッシュを構え、素振りをしていた。

先日のように友を守れないことがないように

昨日の自分よりも強くなるために

その真剣さは異様なまでに凄まじく、いつも一緒に居るアルフでさえここまでのフェイトの気迫は見たことがなかった。

A M 6 : 4 5 海鳴市桜台林道

なのはは朝早くから公園魔で出向き、日課となっている魔法の練習を始めようとしていた。

両手に意識を集中して、スフィアの形成に挑むも失敗する。

「「はあ」「」

近くで見ていたユーノと一緒に溜息を吐くのであった。

side out

「やはり、はやての家で飲む朝の一杯は美味だな」

「それには激しく同意するぜ」

ヴィータよ、分かってくれるか。

例え、既知であろうとも美味しいものは美味しい

「そう言えば、迅は家に帰らなくてもいいのか？」

「いや、帰るとしてももう少しこの家に泊まって行くな」

実際に蒐集の手伝いをしているのだしな。

なにかとこの家に泊まっていた方が都合が良い。

「主はやて、そろそろ……」

「あ、わかった」

はやてはこれから病院だったな。

二人はリビングを後にする。

「では行くとするか、ヴィータ、ザフィーラ」

「「おう」」

これからは二人と俺で別れて得物を探す。

俺達は魔方阵の光に包まれて姿を消した。

なのはside

私とフェイトちゃんは私の部屋で事件のことについて話していたの。

「ね、なのははあの人たちのことをどう思う？」

「あの人たちって…闇の書の？」

「うん、闇の書の守護騎士たちのこと」

あの人たちの事が……

「えっと、私は急に襲い掛かれて直ぐに倒されちゃったからよくわかんなかったんだけど、フェイトちゃんはあの剣士の人となにか話してたよね？」

「うん。少し不思議な感じだった。うまく言えないけど、悪意みたいなのを全然感じられなかったんだ」

あれかな、お兄ちゃんとかお父さんが話してたけど

ある一定以上の實力を持っている人たちが拳や剣を交えると時に言葉よりも多くを語る

とか言ってたそれでフェイトちゃんは感じたのかな。

「そっか、闇の書の完成を目指してる目的とか教えてもらえればいいんだけど」

無理だよな。

こんな時、迅お兄ちゃんならどうするかな？

「話ができそうな雰囲気じゃなかったもんね」

せめて、お話ができれば良いんだけど。

「強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉ってなかなか入ってこないから。私も、そうだったしね」

そうだった、フェイトちゃんもプレシアさんの為に必死にジュエルシードを集めてたんだ。

結局、それはアリシアちゃんの為であって、管理局に事情を話して無事に終わったけど

裁判ももう少しかかるんだっけ？

プレシアさんはまだ向こうにいるみたいだし。

「私の場合は勘違いで終わったから良いんだ。アルフも私みたいにずっと疑心暗鬼で母さんのこと疑ってたけど今じゃあ仲良しだしね」
良かった、家族の仲は良好みたいなの。

「言葉を伝えるのに戦って勝つことが必要なら——それなら、迷わずに戦える気がするんだ」

「フェイトちゃん……」

「なのはが教えてくれたんだよ」

ニコツと笑うフェイトちゃん

その瞳には強い意志が感じられた。

「その強い心を、なのはが教えてくれた」

「やあ、なんだか恥ずかしいよ。」

照れてるのがバレたのかフェイトちゃんはクスクス笑いだして、私も釣られて二人で笑いあったの。

なんだか平穏な時間、こんな時間がずっと続けばいいのに——

side out

episode ?? (後書き)

関係ない話ですが、ちょっと先日のお話です。

この前、自分がとある料理店で一人で食事していると近くのテーブルになるのはファンの方々が居ました。

二次創作も拝見しているそうで、このサイトの話にもなっていました。

するとすると、なんとこの作品のお話も出てきてるじゃないですか！

いけないとは思っているんですが聞き耳を立ててみると

『面白い』やら『続きが気になる』など仰ってくれる方も居れば

『嫌い』やら『物語や文の構成が甘い』やら『もう少し勉強してほしい』などと頑張らねばと思うこと

賛否両論の意見でした。

漫画やアニメの作者ってこんな感じなのかな～と思わされました。

でも見てくれている人の話って、例え悪くても励みになります。

本当にありがとうございます。

……っと、そろそろいつも通りに――

最近スランプです。

オリキャラや誰に誰の聖遺物を与える、また作るなら、どんなオリ聖遺物を作るか悩んでいます。

あなたの渴望はなんですか？ 教えてはいただけませんか？

もしかしたらその渴望を持ったキャラや設定で作るかもしれません。

よければ感想などをお待ちしております。

e p i s o d e ? ? (前書き)

すみません、スランプです。

なので、とは言いませんがかなり短めです。

申し訳ありません。

episode ??

「……囲まれているな」

海鳴の街で一番高いビルの屋上に立って、俺はヴィータとザフィーラを見る。

二人の周りには武装した人間が十名近く居り、囲むような陣形をとっている。

ふむ、ここで時間稼ぎをして主力が来るまでの時間稼ぎか。

「管理局か」

「でも、ちよろいよコイツ等。返り討ちだ!」

二、三百メートル離れている二人の会話が俺の耳に届く

ヴィータが構えると同時に囲んでいた武装兵たちが一気に散開する。

「?」

ヴィータはなにが起こったか分からないようだ。

「上だ」

冷静なザフィーラの声

二人の上には青い魔方阵があり、その近くにはいつかのフェイトとなのは決闘を邪魔した男が居た。

「ステインガーブレイド、エクスキューションシフト!!」

剣の形を模した魔力弾の雨が放たれる

どうやら貫通の性質をもっていそうだ……しかし、あの少年

攻撃に憎しみがこもっているな。

「ちい!」

ザフィーラの盾でその攻撃をやり過ごす。

辺りには余波で爆発が何度も起こる。

爆発による煙が晴れるとザフィーラの右腕に三本ほど先程の魔力剣が刺さっていた。

「ザフィーラ!」

「気にするな、この程度でどうにかなるほど……柔じゃない」

腕に力を入れて刺さっている魔力剣を破壊する。

ほう、非殺傷設定とは便利だな。

刺されていたはずのザフィーラの腕からは一切の血が流れていない。

「上等！」

ヴィータはそんなザフィーラを見て、猛禽類のような笑みを浮かべた。

「む、この感覚は——あの二人か」

なのはとフェイトが武装し、二人のことを見据える

「あいつらのデバイス、あれってまさか!？」

カートリッジシステムか。

新たな力を手に入れた二人、果たしてどのような展開を見させてくれるかな？

episode ?? (後書き)

寝ながら話を考えよう。

e p i s o d e ? ? ? (前書き)

更新が遅れてしまったorz

今更ながらにアザトク気づいた。

この作品って、Diesやったことのある人しか分からないんじゃないかな？

episode ???

それは、小さな願いでした。

何事も無い静かな日々

ただ、穏やかに続いて行く毎日

私はなにも望んだりせえへん。

私はどんな力も欲しないから

ただ、そばに居てくれれば良かった。

そしたら、私が皆を守るから。

気持ち少し、すれ違う時も

だけど、それでも――

魔法少女リリカルなのは『疾走する聖遺物』 a・s 編 始まります。

シャルside

私ははやてちゃんとスーパーに買い物に来ています。

ヴィータとザフィーラが蒐集から帰ってきたら温かい鍋を振るってあげるんです。

「そやけど、最近みんなうちに居らんようになってしもつたな」

「えっ、ええ、そのお……なんでしょうね？」

言えない、はやてちゃんに黙って蒐集活動しているなんて言えない。

「ああ、別に私は全然良えよ。みんなが外でやりたいこととかあるんやったら」

そう言っただけはやてちゃんの顔は少し寂しげでした。

「うちはもともと、一人やったからな」

「はやてちゃん、安心してください」

はやてちゃんの前に出て話しかける。

もう少し、もう少しで終わりますから。

そしたらみんなでもたいつもみたいに笑いながら生活ができるようになるんです。

「心配はしとらんよ、もしもやけどうちの家族が危険な目にあつたら迅が何とかしてくれるんや」

迅——はやてちゃんの親友のあの子ですね。

「信頼してるんですね」

「それはそうや、迅とは今年会ったけどうちが一人になるのを嫌っていつも一緒に居ってくれたしな。性格も把握しとる。仮に助けてくれなくてもうちが頼めばやってくれるで」

迅君のことを話すときはやてちゃんは本当にうれしそうです。

「前々から思ってたんですけど、はやてちゃんて迅君のことが好きなんですか？」

そう聞くと、顔を真っ赤にしてアタアタし始めちゃいました。

「ななな、なんでそんなこと聞くんや!？」

「ふふふ、やっぱりなんですね」

ああ、こんな時間が素晴らしい。

こんな幸せな時間がまた来れるように、頑張らなくちゃいけませんね。

side out

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない」

フェイトが宙に浮かぶヴィータとザフィーラに向かって話しかける。

「まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指している理由を」

そんなのはとフェイトを腕を組んで冷たい目で見下ろすヴィータ

「あのさ……ベルガのことわざにこういふのがあるんだよ」

おや？ ヴィータがことわざのようななかなかに高度な引用が出来るとは驚きだ。

それは俺だけではなく、ザフィーラも思ったようで顔をヴィータへと向けている。

「和平の使者なら、槍は持たない」

ふむ、言い得て妙だな。

確かに和平しに来たのであれば武装する必要もあるまい。

しかし、二人には意味が伝わらなかったらしくフェイトとなのははお互いに顔を合わせて首を傾げている。

「話し合いをしにきたのに武器を持ってくる奴がいるかバカ！ つて意味だよ、バカ」

「いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれを言う？」

「それにそれはことわざではなく小話のオチだ」

……ヴィータよ、仲間からも追撃を喰らっているではないか。

「うつせ！ 良いんだよ、細かいことは」

ヴィータがそう言ったとほぼ同時に上空の結界から紫の光が走った。

シグナムか

「っ！ シグナム……」

フェイトが一気に警戒態勢に入る。

「ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね！ 私、あの子と一対一だから！！」

シグナム対フェイト

ヴィータ対なのは

では、ザフィーラはアルフあたりか？

「マジか」

「マジだよ」

俺から離れているが男子二人のつぶやきが聞こえてきた。

では暇になってしまうのが二人も居るのだな

ならばそろそろ、俺も参戦しようではないか。

三人称 side

この場に緊張状態が続く中、ヴォルケンリッターの面々は焦っていた。

以前、戦ったことで自分の相手の戦力はある程度は把握している。

苦戦は必至、しかも今回相手はカートリッジシステムまで装備してきた。

勝ったとしてもその時はボロボロになっているに違いない。

その時、残りの二人を相手に出来るか？

答えは否だ。

ならばどうすれば良い？

膠着状態のまま、頭を悩ませていると突如——戦場に声が響き渡った。

『よかろう、以前のその少年のように決闘を邪魔しに来られてもつまらん。俺が二人の相手になろう』

誰もが瞬時に理解した。

以前、そして今回もずっと誰かに見られていたような感じがしていた。

その正体がこの声の主だと。

そしてその正体はクロノを除く全員が知っている。

この戦場に居た誰もが宙を見上げる。

瞬間、天が爆発した。

爆風が辺りに一気に吹き荒れる。

「ようこそ、海鳴の街へ諸君。この街は君達すべてを歓迎しよう。ここで何を望み、何をするかは君たちの自由だ。君たちが攻撃してこなければこちらからも特別干渉はせん……だが、今回は友の家族が関わっているのだな。少々、干渉をさせてもらおう」

そこにはまるで空に広がる夜天のような神秘的な黒さをした腰まである髪をした他者を圧倒する神のような存在の少年が居た。

少年の手には黄金の槍が握られている。

少年が現れてから、立つことすら皆が出来ていない。

なのはやヴォルケンリッターといった、普段の威圧にも耐えている存在達ですら息をするのですら辛くなっている。

「では、クロノ少年、そしてユーノ、死にたくなければ必死に足掻きたまえ」

こうして、死神は表舞台へと出てきたのであった。

e p i s o d e ? ? ?
(後書き)

じゃあ、そろそろ説明の回とか作っちゃおっかな？

でも今更な感じがするし……どげんするか？

e p i s o d e ? ? ? (前書き)

今回は迅無双w w w

話の書き方とかが分かりにくかったら申し訳ありません

そう言えば円卓の名前決めてないや……

黒円卓で良いかな？

episode ???

三人称side

「な、なんで、迅お兄ちゃんが?。」

白いバリアジャケットを着て、ヴィータと相對していたのはが顔を絶望に染めて震えた声で呟いていた。

「まさか、あいつがこんなところで……」

「い、いや!。」

ジュエルシード事件で数度だけ会ったことのあるアルフとフェイトも絶望に声を上げている。

「う、うああ——」

「く、はあ、があ——」

睨まれているユーノとクロノは息することすらままならない。

「その少年二人、どうした? 息の仕方を教える程俺は優しくはないのだが」

夜天のような黒髪をし、黄金の槍を持つ少年が自分の下に居る二人へと話し始める。

圧倒的存在感でこの場は黒髪の少年によって完全に支配されていた。

黒髪の少年以外の人間は全て、恐怖し、跪き、息すらも忘れている。

「来ないのなら、こちらから行こうではないか」

少年——高町迅は手にしている黄金の槍を握りしめ、そんな人間たちを観察している。

「俺がまだ本調子ではない（……………）のに圧倒されるとは…………」

心底残念そうに言い、迅は溜息を吐いた。

『シャマル、聞こえるか？』

『はい、なんでしょう？』

『今、捕縛結界内なのだが強制転移は可能か？』

『……一応は。一分ほどお時間をください』

『よかるう』

短めにシャマルとの会話を終えて、再び二人へと振り向く。

「では、始めようか」

迅が黄金の槍を投擲する。

そしてその槍は二人を貫いた。

そう誰もが思った

「逃げてええええええええええ！」

しかし、その二人を叫びながら突き飛ばして回避させた少女が現れた。

「ほう……」

迅が面白そうな視線を向ける先にはなのはが居た。

「はあはあはあ、みんな逃げるよ！」

叫ぶのはだがその足は震えていた。

「なのは、避けて!!」

フェイトの声が耳に届くとほぼ同時になのはは全力で横に跳んでいった。

一瞬前までなのはが居た場所は衝撃と共に切れ目が入り、大地が裂けた。

「残り40秒だ、頑張りたまえ」

迅は無表情に告げて、もう一度投擲の体制に入る。

「みんな、散って！ 固まってちゃ駄目!!」

なのはも先程よりは冷静さを取り戻し、仲間へと指示を出す。

ゆっくりとした動きで迅は槍を投げる。

しかしその速度は亜音速に近い早さ、なのはたちは着弾の爆風で吹き飛ばされる。

「残り35秒」

カウントダウンを続ける迅

なのはたちは自分の魂が燃えていくような錯覚に陥る。

「とにかく遠くへ逃げるの!!」

恥もなにもかもを捨て去ってなのはたち全員が逃げ出す。

それをヴォルケンリッターが追うことはない

否、追えない。

「残り30秒」

ようやく半分を切ったところで更にもう一投

槍の軌道である百メートルほどの直線の道路は地面が抉れ、コンクリは完全に消し飛んでいた。

「ふむ、これでも一割ほどの力も出していないはずなのだが……手加減がうまくなったと思っていただけだな」

少しガツカリしたように呟く。

投げた槍はまたその爆風のみでユーノとフェイトを吹き飛ばす。

ビルのガラスも一斉に割れる。

「残り25秒」

迅はシグナム達に一か所に纏まるように指示を出して、辺りを見回す。

一投

今度は、ビルに向かって投げる。

槍は三個のビルを貫いてその先に居るクロノの近くを通り過ぎた。

声すらも出せずにクロノは錐もみ上に回転しながら地面へと爆風によって叩きつけられる。

「残り20秒」

正に絶望、クロノの方へと投げた槍が旋回して戻ってくる。

「（ここらへんでよしの方が良いかな？

ここで完全に心を叩き折っておけば、確かに闇の書の蒐集が楽だろう。

だがそれは少なくとも闇の書の起動まで全員の心が戻らないということ。

それではつまらん。

だがここで潰れるのなら所詮はそこまでか……」

少し、様子見をしてから一投

「残り15秒」

そう呟く間にも亜音速に近い一撃が放たれる。

「きゃあああああああああ！」

無情にもその一撃はなのはの近く——と言っても数十メートルは離れているが——を通り、なのはを吹き飛ばす。

「いやあああああああああああ！」

旋回した槍がなのはの時と同じくフェイトを吹き飛ばす。

「残り10秒、では残り一投としようか」

なのはとフェイトが吹き飛び、ビルに戦いつけられているクロノとそれを治療しているユーノの下へと転がり着く。

それはすなわち、一か所に全員が集まったということ。

「9」

カウントダウンを始める迅

ゆっくりと振りかぶり、力を入れ始める

「8」

シグナム達はそんな迅の近くへと寄り、転移の時間を待つ

「7」

次は当てるとい意志を槍へと注ぐ

「6」

見据えるは若き魔導師達

「5」

“死神”の名に相応しきその一撃を持って敵を粉碎すべく

「4」

今こそ、その一撃が放たれる

「3……む？」

足下に現れた転移魔法陣

即座に迅はシャルのものだと判断した。

「どうやら少々用意の時間が早かったようだな。しかしこれで奴らは救われたことになってしまったか」

迅はなのは達を一瞥し、微笑む。

「これも貴様らの運だ、もしも次に敵対するのであればもっと成長したまえ」

そう言つて、迅達は姿を消した。

—— 大きな、大きな、心の傷を小さき魔導師達へと刻み付けて。

episode ??? (後書き)

これは別に構いませんが、円卓の名前の候補とかもあればよろしく
お願いします。

感想お待ちしております。

e p i s o d e ? ? ? (前書き)

どうもこんばんわ。

23：55分に投稿です。

なぜに時間書いたしwww

最近PCの調子がすこぶる悪くて作品が執筆できません。

楽しみにしてくださっていた方々には本当に申し訳ありません。

もう少しPCの修理がかかると思いますがよろしくお願いします。
ます。

episode ???

「予想よりも転移の準備が早く終わったのだなシャル」

「と言っても数秒ですよ。もっともそのおかげで彼女たちは無事だったのですけど」

俺は転移してはやての家に戻ってくるとさっそくシャルを称賛した。

「そうだな、これも彼女たちの運命だったのだと思うしかあるまい」

そうでなければ逆につまらんな。

「それよりもお伺いしたことが」

「なんだね？」

「先程の槍はなんなのですか？ その……何と言いますか私は遠見の魔法で見ていたのですがそれでもなんか心にこう——穴が開いて行くような感じがしたのですが」

「ああ、あれは私の武器だよ。心に穴が開くと感じたのは魂が消滅仕掛けていたのだ」

「魂がですか？」

「うむ。説明は少々面倒なので省かせてもらうが、あれでも本来の

「割ほどしか出せてはおらん」

「あれですか!？」

「もしも仮に本気で撃つていたら街を一つは破壊する自信がある」

これは慢心とかじゃなくて本気の話だ。

「……では、次は本気を？」

「いや、理由は言えんが本気は出したくても出せんのだよ」
もどかしい話ではあるがな。

さて、シャマルとの話はここらへんにしておいて周りで見ている他の三人も何かを言いたそうだし聞くとでもするか。

side out

リンディ side

私は何度も何度もなのはさんの兄という人の映像を見ていた。

なんという恐ろしさ

なんという破壊力

なんという神々しさ

今まで私は多くの人の命を奪ってきた。

だけでもこんな圧倒的な力があれば助けられたのかもしれない。

いや、それは余計な考えか。

今回の闇の書事件ではなのはさんに兄と闘わせることになる。

恨まれるかもしれない。

実際にアースラ内でも反感を持っている人も多い。

それでもやらなければならない。

こんなところで止まっていたはいけない。

私は救われるべき人間ではないのだから。

このような苦行は当たり前だ。

罪は償わねばならない。

決して、決して、私は救いを求めてはならない。

未来永劫、私は罪を償いながら生きて行けばならないのだ。

そして私はこの“死神”の映像をもう一度見始める。

ああ、なんと素晴らしい御方なのだろうか。

side
out

e p i s o d e ? ? ? (後書き)

短い、でもこれが今の限界なのです。

では皆さんこちら辺で。

感想お待ちしております。

e p i s o d e ? ? ? (前書き)

今回は幕間のお話なのでかなり短いです。

e p i s o d e ? ? ?

??? side

ここはいつも変わらない。

私は砂浜に立っていつものように向こうを見ていた。

私は“ずっと”ここにいる。

「あなたに恋をした、跪かせていただきたい」

目の前でローブを被った男の人が跪きながら私の手をとって見上げてくる。

「ふふふ、こんにちは。カリオストロ」

この砂浜に現れる私以外の人

でもこの人は ■ ■ ■ なんだよね。

そう、ここは普通の人間が来れる場所じゃない。

私の為の世界

夢と現の間に存在する、世界

今日も私はここで一人、黄昏を眺め続けた。

目が覚める。

「ん、んう」

寝起きは比較的いい方だ。

私はベットから降りて服を着替え、朝食を取りに行く。

食堂では地球の料理も出されているので少し楽しみだ。

「おはよう、ご飯ある？」

「お、チビツ子の中ではいつも一番だな嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにはおばちゃんが一品おまけしてやろう」

気前が良い人だ、食堂のおばちゃんは。

私はご飯を食べて食器を片づけると、医務室に向かった。

中に入ると、なのはとクロノとフェイトがそろぞれのベットで寝ていた。

「みんな、元気？」

「ああ、元気だよ」

「私も大丈夫だよ」

「……………」

クロノとフェイトは元気らしい、でもなのはが落ち込んでるみたい。

「なんで、迅お兄ちゃんが——」

二人に話を聞くとずっとこればかりらしい。

一体、なにがあったんだろう？

s i d e o u t

e p i s o d e ? ? ? (後書き)

さあ、一体正体はだれでしょうか？

答えは——みんなわかってるだろうし良いか

episode ??? (前書き)

今回は長めかな？

episode ???

??? side

「あなたに恋をした」

この私が……迂遠つえんかつ婉曲えんきよくかつ理解を期待せぬこの私が……ここま
で素直、簡潔に、他の解釈を寄せ付けない直言を口にしたのはなぜ
なのだろう。

「あなたに跪かせていただきた、花よ」

無論、よく分かっている。つまるところ、私は緊張してるのだ。

恐怖で、そして羨望で……いやいや、もしかしたら憎悪かもしれな
い。

ただこの少女に、無視はされたくないと思った。

取るに足りぬ一人として、流されることだけは避けたかった。

ゆえに言葉の装飾は剥されて、ひどく無粋な……婦人を口説くにし
ては雅の欠片もない直言を口にしている。

実際、この時の私は初心な少年のようだった。

私の少年時代などというものは実在したかどうかはともかく、青い
と言われる時代はこのとき、一瞬。

己の発言に「しまった」――などと恥じ入ったのもこのときだけ。

今に至るも不覚なのだが、あまりにそれが強すぎたため、一瞬の熱に紛れて判別できなかったのだ。

既知か未知かを。

常時曖昧な私が初めて確たる態度を示した結果は、もっとも曖昧なものになったという笑い話。

これは私の、そうした甘苦い失敗談

君に共有してほしい、彼女への愛情。

「あなたは、誰？」

私は君の――

「あなたの奴隷だよ、アリシア・テストロッサ。

あなたの所有物であり、あなたの力であり、あなたの分身としてあなたを救い、あなたのお陰で幸せを得るあなたの傀儡だ。

わたしはそのためにも生まれた」

ゆえに、さあ、目を覚ましておくれ。

実に喜ぶべきことではないか。

私の友が君のために、この既知という名の世界を壊してくれるだろう。

はやく目覚めなければその始まりが見れぬやもしれん

ああ、まったく、本当に——いい友、いい女、そしていい運命を背負ったものだとかうたくなる。

素晴らしい

カドゥケウス
双蛇は切れぬ。断てぬ。引き裂けぬ。

今再び、前にも増して、強く深く絡み合おう。

より完成へと近づくため、脱皮して生まれ変わるのだよ。

幸いなことに我が末裔もいる。

さあ、始まりはそう遠くない。

side out

???side

目が覚める。

「ん、んう」

寝起きは比較的いい方だ。

私はベットから降りて服を着替え、朝食を取りに行く。

食堂では地球の料理も出されているので少し楽しみだ。

「おはよう、ご飯ある?」

「お、チビツ子の中ではいつも一番だな嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにはおばちゃんが一品おまけしてやろう」

気前が良い人だ、食堂のおばちゃんは。

私はご飯を食べて食器を片づけると、医務室に向かった。

中に入ると、なのはとクロノとフェイトがそろぞれのベットで寝ていた。

「みんな、元気?」

「ああ、元気だよ」

「私も大丈夫だよ」

「……………」

クロノとフェイトは元気らしい、でもなのはが落ち込んでるみたい。

「なんで、迅お兄ちゃんが——」

二人に話を聞くとずっとこればかりらしい。

一体、なにがあっただろう？

side out

前回の作戦としてはまず、前回ヴィータが向かった砂漠にシグナムが向かう

そうして、管理局の戦力を俺らに集中させてヴィータが俺らより離れた世界で蒐集をおこなう

悪くはない作戦だった。

結果としてはヴィータはなのはに長距離砲撃魔法を放たれたが仮面の男が助けに入った。

そのおかげでヴィータは脱出

シグナムとフェイトの戦いはフェイトが突然ヴィータを助けたという仮面の男に胸を貫かれてリンカーコアを取られたらしい。

仮面の男のことが気になるな。

しかしそろそろ俺も蒐集の手伝いを行うか。

「では行ってくる」

「はい、あなたに限ってなんにもないでしょうが行ってらっしゃい」

「ああ、ヴィータとシグナムは休んでおくのだぞ」

「わかってるよ」

「わかっております」

「重畳」

三人に見送られ、俺はシャルマルの転送で移動する。

ちなみに、時空転移のシャルマル特製マジックアイテムを貰っている
ので転移できないなんてことはないだろう。

目の前が光に包まれ、光が収まってくるとそこは古城であった。

「ふむ、プレシアの時に箱庭に似ているな」

奥に進んで行くとどうやら誰もここには居ないようであった。

見る限り、大昔には人が住んでいたのだろうが今は何らかの理由で
いなくなっているようだ。

「あなたはだれ？」

ダンスホールに出ると、ふと声を掛けられたので振り向く

するとそこにはフェイトが居た。

「いや、アリシアのほうか」

アリシアの後ろには武装した管理局員となのは、フェイト、クロノ、

ユーノ、アルフ

恐らくは主戦力の人間がほとんどやってきていた。

だが今回はとくに力を抑えるつもりもないのでアリシアを除く全員が身動きが取れないようだが

「……あなたはなんで私の名前を知っているの？」

「失敬、名乗るのが遅れた」

なのでアリシアの後ろの人間などは気にせずに、仰々しく頭を下げて名乗る

「俺は高町迅——聖槍十三騎士団黒円卓第一位 死神高町 迅、ディア・ゴット・デス・トデス君の名前は？」

アリシアは少し考えて頷いた

「私の名前はアリシア・テストロッサ」

「良い名だ」

俺は手を差し出して膝をつく

「お近づきの印に一曲踊ってはくれまいか？」

「……わかった」

そっと俺の手を取るアリシア

俺はパチンツと指を鳴らして楽団を生み出す

そして二人で音楽に合わせて踊りだす。

アリシア side

その衝撃は、閃光に似ていた。

「お初にお目にかかる、私の事はカールから聞いているかね？」

身体を握りつぶされるような感覚は一瞬、気づけば私はこの男性の腕の中にいた。

意識に霧がかかってくるような美貌、典雅な高貴さを感じさせる声。

そして私を抱きしめる腕の抗えない力強さ。

おそらく、彼は男性として完璧な美点を持っている。

強いて言うならば少しだけ女の子に近い顔づくりってことだけ。

あらゆる角度からみてもそれ以外のことは見つからず、その輝きは失われない黄金率

だけど……私の中には言いようのない感情があった。

決して高位の男性に惹かれる女心ではなくて

なんというか、言葉にできない感覚

楽団の調べが聴こえる。ここはどこかお城の大ホールで、何十人というオーケストラに囲まれたわたしたちは、その中心に立っていた。

「彼らは俺の騎士で、同胞だ。皆が君を歓迎している」

そして、わたしは事態を認識できないまま踊った。

「彼は俺を何と言っていたね、アリシア」

不思議だった。分からなかった。わたしは踊り方なんて知らないし、貴族めいた社交場の作法なんか何も知らないはずなのに。

「理解を深め合う最良の一つとして、共通の知人を話題にするのは有意義だ。あなたの知る彼は、どのように俺を評していたのだろう。是非聞きたい」

非の打ち所がないエスコートで、わたしは宮廷に生まれ育った娘の様に扱われた。

誰もこの身を蔑んだりしない。

これは何なの？ どういうことなの？

たぶん“常識的”に考えれば、女性の大半が夢見るような歓待を受けているのは間違いない。

およそ欠点の見つからない男性から、おそらく最高のもてなしを遇されている。

すべてが華美で、豪華で、洗礼されて……気遅れしても嫌がる女は稀だろう。

でもわたしはどうして、この男もこの城も、この音楽も何もかもがどこか違って見えた。

言葉にできない。分からない。これをどう表現したらいいのだろう。まっすぐに見つめてくる金色の瞳から、思わずわたしは目を逸らしていた。

耳に流れてくるような管弦楽。荘厳な音色は透き通り、見事な技量で統率されているのがよく分かる。

だけどその演奏を続ける一人一人は、どこか歪に沈んで見えた。

まるで喪に服している最中みたいに。

いや、それよりも……

「……………」

なに？ なに？ 何なのこれは？ よくよく見れば残らず全員、身体の一部がその大部分を失っている。

中にはとても生きているとは思えない人達さえいて……

わたしは、直感的に理解した。

これは、死人の楽団なのだ。

「答えは？」

黒い髪をした、金色の瞳の男性は微笑する。

彼は、彼一人だけは異常なほどに欠けているものが何もない。

まるで、そう、この人と、この世界は……

「地獄……」

数え切れないほどの人間を呑み込んで、その死と苦痛を渦巻かせている。

そんな印象をわたしは懷いて……

「なるほど。変わらん、あの男も」

彼は悪魔のように優しく言う。そうだ、異常は最初からあったのだ。なぜわたしが、こんなにも情緒溢れた思考と感情を持つのだろう。

本来知るはずがない語彙や概念を持ち得るのだろう。

今こんなことを考えているということ自体、すでに充分すぎるほどに普通じゃない。

「これは…痛み？」

だから、知らずのうちに呟いていた。

持っていないはずの知識がわたしのわたしである部分を壊していく。
演奏を続ける使者たちと同じように。

「地獄、地獄か……個人的には呼び名など、どうでもよいがね。だが無感であれば痛み（歓喜）はない。俺の世界においてそれは許さ
ん」

だから分かった、これは恐怖。

わたしがこの男性に懷いた心は、どうしようもなく怖いというただ一つ。

ああ、だってカリオストロも言っていたもの。

とてもとても怖い人だと。

みんなも震えながら感じていたもの、この死神が恐ろしいと。

その原因……具体的なものがわたしには分かる。

「あなたはたった一人」

わたしと同じだけど違うのだ。

たった一人外れているのは同じでも、彼は一人で他の総てを塗り潰せる。

「かもしれん」

そう、喻えるなら。

「君は大海に落ちても溶けぬ宝石。俺は大海を染め上げる墨のようなもの」

共に一粒、一滴だけど、その違いは影響力

「霸道と求道、カールはそう言っていたな。前者は俺、後者は君だ。俺としてはそちらの方が眩しく見えるよ。我が配下にも似たような資質の者が複数いるがね」

分からない。分かってはいけない。だけど嫌になる。分かってしま
う。

「カールは霸道の激突を望んでいる。無論俺も、そこは同じ。ゆえに彼がいて、彼が愛する君が要るのだ。問おうアリシア、この地獄（俺）をどう思っかね」

演奏は週末のレクイエム。

それを奏でるのは死者の楽団。

彼の世界が海に落ちれば、総てその色に塗り潰される。

だから……

「怖いよ」

わたしが、そしてあの人が……この死者の国に犯されて消えるのが

怖い。

おそらく今、生涯初めて、わたしは拒絶というものの意味を知った。
漆黒の男は笑う。その一言を待ち望むように。

「ならば共に天を戴かず——祝おう、ここに宣戦は布告された」
衝撃は閃光に似て、輝く槍の形になる。

城を揺るがす関の声が、数百万の痛み（歓喜）となってわたしの胸に突き刺さる。

「その誓い、努忘れぬように呪いを送ろう。痛みが胸にある限り、そは御身を溶かし続ける」

旅に出たいかと前に言われた。ずっと一人で歌い続けたいかと質問された。

私はあの時、それに答えることができなかったけれど。

「わたしは負けない」

変わらなきゃいけない、あの砂浜で一人歌い続けていたころとは違う。

世界という名の海の中でずっと一人、溶けない石ころであったわたしは、今この時から変わって行かねばならない。

わたしはこの世界に一步踏み出して、もうと止まらないんだ。

e p i s o d e ? ? ? (後書き)

いかがだったでしょうか？

物語で穴がそろそろ沢山明るみに出てきそうです(汗)

感想をお待ちしております

episode ??? (前書き)

お久さです。

今回はかなり短いwww

episode ???

アリシア side

私は迅が消えてからその場でしばらく、ボーッとしていた。

なのはちゃんのお兄さんでカリオスト口の友達

……恐かった

とにかく一つの修羅場は潜り抜けた……と思う

でも

「なんで私ってば宣戦布告なんてしちゃったんだろorz」

そんなバトル展開なのはちゃんやフェイトに任せておけば十分だよ

そもそも、私は魔法があまり使えない

お母さんやフェイトみたいに雷で闘うなんてありえない

魔力変換質が違うからってこともあるけど、元来の魔力保有量が少ない

これじゃあ戦うことなんてできないよ

だってなんか『我が軍勢^{レギオン}と最強を謳う断頭刃を持って相手しよう』とか言ってたもん。

この前は槍でだったでしょう？

じゃああれでも本気じゃなかったの？

って、なんで私ってば戦うことを前提で考えてるのかな。

『ちよつと、アリシアさん大丈夫！？』

いきなり空中に映像が出てきて、リンディさんが現れたことに少し驚いたのは内緒だ。

「うん、大丈夫。でも闇の書は持ってなかったよ」

「それについてはわかっています。それよりもフェイトさんが――

――」

私はフェイトが謎の仮面の男に襲われて、リンカーズコアを蒐集されてしまったとの報告を聞いて急いでアースラへと戻った。

しかし、私の胸には迅とのやりとりが残っていたのだった。

……………戦いたくないよお（泣）

side out

はやてside

なんや、昨日から迅が楽しそうや。

「なあ迅」

「なんだね？」

ちなみに今は風呂

今日はみんなの帰りが遅くなるらしくて、久しぶりに迅と二人きりや

「昨日から楽しそうやけどもなんかあつたん？」

「ああ、あつたさ。この俺が宣戦布告をされたのだよ」

なんや、それだけかい——つて

「いやいやいや、どんだけやねんその子!？」

一応、ウチは迅との付き合いもそこそこ長いし良く分かる。

こいつに喧嘩売るなんてありえないで、そもそもそんな気が起きること事体がありえへん。

「残念ながらそれも既知だったがな」

はあ、既知つてもんはなんやねん。

そんなに迅を苦しめたいんか？

そんでもって迅が未知を味わった時、うちのことをショック死させ

る気かいな？

だって迅が未知を味わうなんてこと、宇宙創成ぐらいのことが起きると味わえんとちゃう？

身体と頭を洗ってもらい、風呂の中に入るとうちは迅に背中から寄りかかる。

この態勢、世間では恋人座りとか言われとるらしいけども……ふふふ、うちと迅がカップルか

こんな状況だし、いつそ告ってまうか？

いやいやいや、やめておこう。

今はこの状況で幸せなんやし、変える必要なんてあらへんやろ。

「しかしまあ、迅に宣戦布告ねえ……頭おかしいんちゃう？」

「そついうが、よくはやても俺に喧嘩を売るではないか」

「それはうちが頭おかしいってことか？」

なんかム力ついたので頬を引っ張ってやる。

「ハハハ、いまひやらにやにをいうか」

「むう、よりもよって迅に頭がおかしいって言われた、遺憾」

そう言いながら頭を迅の胸にピッタリとくっつける。

「怒らせてしまったならば謝罪せねばな」

「せやで、だから今日は一緒に寝よな」

迅は誰にも渡さんで、うちのものや。

だからうちと一緒に居てな、迅

s i d e
o u t

episode ??? (後書き)

はやては今のところヤンデレではありません。

言うなれば一人だった時代に現れた親友に依存しているようなものです。

ヤンデレにするかは書きながら決めて行こうと思います。

忘れられ気味ですかアンケートのご協力よろしくです。

地雷とわかっていても挑んでみるのが俺です。

episode ??? (前書き)

さてと、リインフォースを生かすか生かさないかどうかどうしよう？

episode ???

「ほう、今日は友の家に泊まりに行くのだな」

「せや、だから留守は頼んだで？」

「任せよう」

夕暮れ時、はやては本日は友の家に泊まるらしく俺に留守を任してきた。

「じゃあ行ってくるで」

「待て。シャルよ、付き添ってやってくれ」

「分かりました」

シャルならば護衛にもなるし、不測の事態が起きようとも対処できるはずだ

「じゃあ今度こそ行ってくるで」

「ああ、また明日」

今度こそ俺は二人を見送って、リビングへと向かった。

「さて、正体を明かしたらどうかなその二人？」

いつの間にか家の中に入ってきていた二匹の猫に顔を向けながら言
った。

「にゃ〜」

「にゃふああ」

ほう、あくまでも猫を貫き通すか

「ではしばらく使っていなかったことだし、俺の断頭刃の創造位か

——」

「すみませんでした!!」

光を放って人の姿になる二匹

創造位階の意味もわからんだろうに、本能でそれを感じ取ったか。

「で、貴様らはなにものだね？」

「は、はい、私達は——」

話を纏めるところだった。

闇の書はるか昔にプログラムが壊されており、このままでははや
ての生命にかかわる

本当ならば闇の書の覚醒から暴走までの一瞬の時間ではやてを瞬間
冷凍して次元の狭間に送ろうとしていた

しかし最近、それでは完全な封印または破壊が出来ないと気づいた二人の主であるギル・グレアムはどうしたものかと悩んでおり

なにか案はないかと模索していて、その間に闇の書に異変がないかの監視をこの二人がしているらしい。

「なるほど、そういうことが」

「で、なにか良い案はないでしょうか？」

「俺にはないが、一人どうにかできそうな者を知っている」

「ほんとかにや！？」

「ああ、では丁度俺以外に誰もいないことだし呼んでみるか」

プレシア side

「むむむ、どちらにしましょうか？」

私は現在、大変危機的な問題に直面していた。

「アリシアとフェイトの洋服……お揃いにするか、しないか」

お揃いにしたほうが良いかもしれないけども、あえて違う服にすることで個性を出すという手もある。

いやまで、早まるなプレシア・テストロッサ。

私には金銭的な面での余裕がかなりある。

ならばやることは一つ

「ありがとうございます」

「ふっ、私の勝ちね」

結論、両方勝ってしまえばいい

ふふふ、我ながら恐ろしいわ。

「（プレシアよ、今から指定する家へと来い）」

突然、閣下からの指令

私がい物したデパートから近いわね。

「仕方がない、転移魔法で一度この品を家においてから行きましようか」

出来る限り素早く行動し、指令を受けてから五分以内に到着した。

「遅くなつて申し訳ありません」

「構わんよ、早速だが闇の書に興味はないかね？」

闇の書、元の名前は夜天の書

本来は術式を集める、いわば標本または資料本のようなものだったのにそれを悪用しようとした誰かが変に弄つてしまいバグを起こし

た魔導書

「技術者として言うならば大いに興味があります」

「では、明日までに直す方法を見つけてこい」

ぽんつと闇の書を投げてくる迅様

「これは!？」

「なんなら、この家を使ってもらっても構わんよ」

「早速取り掛からせていただきます!!」

やはりなんて素晴らしい方なんだろうか

私の技術者としての望みも叶えてくれるだなんて……このお方について来て正解だったわね。

もつと、もつとよ!

この探究心を埋め尽くすようなものを私に頂戴!!

世界の真理すらも解明させて頂戴よ!!

私は嬉々として迅様の御命令に応えるべく頑張るのであった。

side out

episode ??? (後書き)

くう、難しいな書くのは。

絶賛スランプ中です。

episode ??? (前書き)

皆様、
一か月ぶりとなりますね。

まずは一言

「更新サボってすみませんでしたあああああああああああ
あああああああああああ！」

もうね、話が浮かばない浮かばない。

今回は難産でしたw

久しぶりだったので主人公の喋り方ってこうだったけ？

とか思いつつ書いてます。

違和感などがございましたら教えてください。

episode ???

プレシア side

私は昨日、闇の書を渡されてから家の研究室でずっと闇の書の解析をしていた。

フェイトはアースラに泊まっているので家には私以外誰も居ない。

結果を報告するために私は迅様に通信をする。

「では、闇の書の管理プログラムを残すのは不可能だと?」

「……申し訳ございません」

あれから休みなくずっと調べていたがどうやら不可能に近いらしい。

「詳しく説明を聞こう」

「はっ!」

闇の書が暴走し、仮にそれを抑え込めたとした場合、夜天の書の管理システムの中に闇の書の暴走プログラムが残ることになる。

なので結局は再び暴走が起きてしまう。

暴走を防ぐためには管理システムの破壊か、完全情報掌握による情報変換処理が必要

後者の場合、管理局のコンピューターを使って最速でも一週間はかかる。

その前に管理システムの存在が自動消去されてしまったために不可能に近い。

「ほう、よろしい。なかなかの成果であった」

「へ？ はっ！ お褒め頂きありがとうございます！！」

私の予想に反して画面越しの迅様は機嫌が良さそうだった。

「大義であった。昨日から一睡もしていないのだろうか？ 休みたまえよ」

「そうさせていただきます」

通信を切ってソファに横になる。

あの笑顔……まさか私の想像を超えて、なにか助ける方法があるとしてもいつの？

「くくく、我ながら遠足前の子供のように楽しみでしょうがないわ
これじゃあ寝れないじゃないのよ。

本当に楽しみね。

side out

通信が終わり、俺はリビングに戻る

「闇の書の主は大いなる力を得る、守護者である私達は誰よりもそれを知っているはずでしょ？」

「そうなんだよ、そうんだけどさ、私は何か大事なことを忘れてる気がするんだ」

「？」

リビングではヴォルゲンリッターの面々が深刻そうな顔で話していた。

ほう、ヴィータよ。

以前までの都合の悪い記憶が飛んでいるはずなのに良く勘付いたものだ。

しかし、ページが集まりはやてへの闇の書の浸食が進んでいる。

この者らに事実を伝えるのは後の事で良からう、はやての様子でも見に行く――

ドガシャンッ！

はやての部屋の方から大きな物音がした。

敵襲……ではなさそうだ。

様子を見にはやての部屋に行くとはやてが胸を抑えてベットの下に倒れていた。

「はやて！」

「はやてちゃん！」

ヴィータとシャルマルが急いではやてに駆け寄り揺すってみるがはやては返事もせずに苦しんでいる。

「触るな、そつとしておけ」

「わかった、誰か救急車を」既に呼んだ、それよりも直ぐに運び出せる用意をしておけ」了解した、迅！」

「ああ、大丈夫みたいね。良かったわ」

病院に運ばれたはやては石田女医の診察を受けて、現在ベットに寝かされている。

「はい、ありがとうございます」

笑顔で答えるはやて

……ふむ

「はあ、ホッしました」

「せやから、ちょっと眩暈がして胸と手が攣っただけや言っただやん。もう、みんなして大事にするんやから」

身振り手振りでやれやれと呆れた様子を出す、はやて

「でも、頭をうつてましたし」

「なにかあつたら大変ですから」

「はやて、よかった」

シャル、シグナム、ヴィータは安心したように言う

どうやら気づいてはいないようだな。

「まあ、来てもらったついでにちょっと検査とかしたいからゆっくりしていつてね」

「はい」

「じゃあ、シャルさんシグナムさん、ちょっと」

「「?」「」」

俺は石田女医を見る、すると向こうも俺の目を見てきて何かを訴えかけてきていた。

なるほど、流石に俺よりもはやてと付き合いの長い石田女医は気づいているか。

よからう、俺が側に居れば良いのだな。

三人称 side

「今回の検査ではなんの反応も出てないですが、攣っただけ……ということはないと思います」

「はい、かなりの痛がりようでしたから」

病室を出たところで石田女医、シグナム、シャルの三人は話していた。

「麻痺が広がり始めてるのかもしれませんが。今までこういう兆候はなかったんですね？」

「と、思っていますが。はやてちゃん、痛いのか辛いのか隠しちやいますから」

「発作がまた起きないとは限りません、用心のためにも少し入院してもらったほうが良いですね。大丈夫かでしょうか？」

シャルはシグナムの顔を見る。

「……………はい」

俯きながら答えるシグナムの顔は悲しげであった。

「それと発作があったかどうかは後で迅くに聞きくとうしょう」

「なぜ、迅に？」

それはシグナムとシャマルの二人が思った疑問であった。

「あの子はこの半年でありますがはやてちゃんとずっと一緒に居てくれました。はやてちゃんの行動や癖は分かりますし、それにはやてちゃんが一番に心を開いている人物ですからね」

だから嘘を見抜きやすいし、強がっているはやてちゃんを懐柔しやすい

そう石田女医女医は言う。

素直に二人はその通りだと納得し、そして自分がそのようなことが出来ないことに憤りを感じたのであった。

「では、戻りましょうか」

「……………はい」

「……………わかりました」

二人はもつとはやてから信頼され信頼するようになって心を決めたのであった。

s i d e o u t

「え、入院？」

「ええ、そうなんです」

俺は石田女医から事情を聞き、こうしてはやての病室にいた。

シャルから入院の話を聞いて、はやては寂しげな顔になる。

「でも、検査とか念のためですから心配ないですよ。ね、シグナム」

「はい」

至っていつも通りの態度で接する二人

「それは良えねんけど、うちが入院している間は誰がみんなの料理を作るんや？」

「うぐっ!？」

この事実が一番ショックを受けたのは間違いなくヴィータであろうことは間違いがない。

「そ、それはまあ、なんとかします」

シグナムもことの重大性に気付いたようで少しだが汗を掻いている。

「そうですよ、大丈夫です!……多分」

逆に嬉しそうにするシャル

「絶対にシャルに料理を作らせてはアカンで」

「「もちろん（です）」」

その場で両手両膝を床につけてorzするシャマル

「毎日会いに来るよ！……だから、大丈夫」

一番はやてに懐いているヴィータが心配そうにはやてに寄る

「ふふ、ヴィータは良え子やな。でも毎日でもなくても良えよ」

頭を撫でながらヴィータをあやすはやて

しばらくして、石田女医が現れ面会時間の終了の知らせを告げに来了。

「迅くんは残って」

他の面々を返して俺は石田女医の言われた通り病室に残る

「じゃあ、お世話よろしくね。たまに様子を見に来るから」

「心得た」

石田女医はそのまま病室から立ち去る

「え？ 迅は残るん？」

「ああ、迷惑か？」

「いや、こつつ嬉しいけども、ウッ！？」

胸を抑えて苦しむはやて

「迅、迅、迅っ！」

はやてが必死に俺の名前を呼びながら服を掴んで引き寄せる

「苦しいんや、痛いんや、側に居てほしいんや」

「よろしい、はやての側に俺は居ようではないか」

冷や汗を流しながら俺に抱きつき、何度も何度も俺の名を呼ぶはやて

どうやら思った以上に闇の書の浸食が進んでいるようだ。

「安心したまえ。元凶はもうすぐ俺が断ってみせよう」

そうすれば俺ははやてを救い、未知を味わたるのだろうか？

e p i s o d e ? ? ?
(後書き)

次回、病室での再会です

e p i s o d e ? ? ? ?
(前書き)

お久しぶりです、ようやく更新しましたw

episode ???

シャルside

『なのは達がここに来ると?』

「はい、ですからはやてちゃんと石田先生に私達の名を出さないように言ってくれませんか?」

『心得た』

通信を切って私は一息つく

迅君ならばはやてちゃんの損になるようなことをしないと思いますし、これで一安心ね

しかし、私も迅君に前みたいにくつくしなくなってたわね。

私だけじゃない、あの死神にくつくしてた他のみんなも自然体で接することができてる

ヴィータちゃんなんて最初の頃は迅君の威圧から解放された後は泣きながらはやてちゃんに抱きついてたのに今じゃあ『アイスを買ってほしい』とねだるまでになったんですもん。

迅君がああの威圧感を抑えてくれるからもあるんでしょうね

「はあ、それにしても大丈夫かしらははやてちゃん」

闇の書の完成まで後少し、はやてちゃんの誕生日までには間に合わせてみせるわ。

S i d e o u t

アリシア s i d e

私達はすずかちゃんの友達という八神はやてちゃんのお見舞いに向かっています

フェイトも怪我が無事に治っている。

治った時はお母さんに泣きつかれていたな

さて、今の私の問題はそんなことじゃない

しつこいようだが迅が本気で闘うなんてどうしようorz

ここ最近、そればかり考えてる

私の力はお母さんやフェイトみたいに凄くはない。

でもカリオストロは『その力は君の魂の強さによって変わるだろう』って言ってた

他には私が誰かを殺してその人の魂を吸収するみたいな方法があるみたいだけど絶対にそんなことはしないもん

近い将来、絶対に私は迅と闘うことになる

その時は私ちゃんと迅に立ち向かえるのか？

「はあ……なんで迅お兄ちゃんは闇の書の守護騎士さん達と一緒にいたんだろう？」

なのはちゃんが最近、すごく落ち込んでいる。

まあ、お兄さんが敵の方で戦ってたらそりゃあ落ち込むよね。

「迅さん、まだ戻ってきてないの？」

「うん、まだなの」

「あはは、あんたブラコンだからそれは落ち込むわね」

「ブラコンとか言われるとなんだか恥ずかしいよ」

でも、すずかちゃんとアリサちゃんとの受け答えはいつも通りにや
つてる。

というかブラコンだって否定しないんだ

「はやく戻ってきてほしいの」

それは私としても同意、そうすれば敵じゃなくなるからね。

「フェイトちゃんはなにか迅さんについて知らないの？」

「え？ ああ、うん。私もわからない」

アリサちゃんとすずかちゃんは魔法のこと知らない本当のことはか
ら言えないか。

「ならアリシアは——って、どうやら着いたようね」

私がそんなことを考えているとどうやら病院に着いたらしい。

受付で病室の番号を聞いて私達は病室に向かう。

『はい、どうぞー』

病室の扉をノックすると中から声が聞こえてきた

『こんにちはー』

私達は中に入りながら挨拶をする。

「こんにちはー、いらっしやい！」

笑顔で迎えてくれるベットに座る女の子

「お邪魔します、はやてちゃん大丈夫？」

「うん、平気や」

「あ、みんな座って、座って」

「ありがとう」

「コート掛け、そこにあるから」

「うん」

みんなと楽しそうに話す、はやてちゃん。

私もその中に入りたいけどもそれどころじゃなかった。

「（な、なにこの子の魂！？）」

この感じ、迅と相対した時に似ている。

私はちょっと特殊で、その人の魂というか、そういうものが感じられる。

だからこそ迅が凄く怖いんだけど。

多分だけカリオストロがくれた力のせいだ。

話が逸れたわ。

はやてちゃんの魂を見ると迅の魂の波長の名残がある。

しかもとても濃い、長い間ずっと一緒に居なかったりしたらこんなにはならないはずだ。

それもなのはちゃんよりも深く、付き合いがなかったら駄目

「（と言うことは、まさかははやてちゃんが闇の書の主？）」

冗談じゃない、私はまさか知らぬ間にこんな敵陣のド真ん中まで来ていたの！？

帰りたい、今すぐ帰りたい

こついう時は外に出て気分転換しよう

とりあえず私はトイレに行くふりをして屋上に逃げる

「ほう……自らやってくるとはな」

「神よ、なぜ私にこのような試練をお与えになるのですか？」

orzして涙を流しながら私は呟く

「だが残念ながら俺はここで開戦するつもりはない」

「え？」

「既に君も気づいているだろう？ はやては夜天の書の主だと」

「……闇の書の過去を知っていたのね」

「無論」

迅ははやてちゃんのことを気に入っている

親友が死ぬ手伝いをするとは……思えなくはないけどきつと今回は違うはずだ

ならば何かはやてちゃんを救う策がある？

「迅……貴方は」

「それを知るにはもう少し待ちたまえ」

まるで私の考えがわかっていたかのような言葉

「それに俺は君と交わした約束も必ず守ろう」

「……戦うの？」

「ああ、必ずやいつか君と敵対した時には、我が全力を持ってお相手しよう」

はあ、本当にどうしよう？

e p i s o d e ? ? ?
(後書き)

むむむ、久しぶりだからどんな風にキャラを動かすか忘れちゃって
るぞwwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0543s/>

魔法少女リリカルなのは～疾走する聖遺物～

2011年8月17日21時46分発行